ASTOON STORY

ひさなぽぴー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＳＴＯＯＮ　ＳＴＯＲＹ

【Ｎコード】
Ｎ０８４５Ｃ

【作者名】
ひさなぽぴー

【あらすじ】
神は運命の糸を手繰り出会いという奇跡を起こす。星と月が互いに導かれた時、すべての歯車が回り始める。その物語のひとつを、ここで紐解こう――。

序章：著す者の言葉～0章1：ねじれ

輝ける剣は星。
煌きし波は月。
互いに導き、導かれる彼らを語るに際しては通常その物語の起点は邪神の封印が解かれた時である。
だが今回、この物語を語るためにはそれ以前の事から全て記さなければならない。
今回の物語が悠久の歴史を誇るこの天球の世界において、非常に特異な物であるからだ。
故に、此度この記録を綴る私の作業量は歴代の統括精霊とは比べ物にならない。
数量にすればそれはおおよそ倍と言ったところだろうか。
だがこれは我々が記録を残していかなければ人々の記憶からは忘れ去られてしまう。
いや、この出来事が何れ忘却の彼方へと去ってしまうからこそ、人ならぬ身である我々が記録を残さねばならない。
人々の記憶に残らずとも、我々はこの世界が歩んだ歴史の真実を記さねばならない。
語らねばならない。
これこそ、我ら精霊に託された本来の役割なのだから。
星月物語第三十七章、全二十四巻。
第四十五代星統括精霊、ゼナルの名において物語の開始をここに宣言する。

← ← ←

笛、太鼓、琴、その他諸々の楽器が音を奏でる。陽は既に落ち、夜闇を照らすのはかがり火だけだ。

今宵は次代の世継ぎが生まれることが決まり、また新たな長が誕生した祝いの宴。人々は歌い踊り、束の間のお祭り騒ぎに酔いしれている。

その中にあって、たった一人祭りの人垣に一切加わることなく物憂げに月を見上げる男がいた。彼は紫紺の瞳に翠緑の光を映しながら、烏羽色の髪をかき上げる。

男の名はゾデア。この村において最も優れた実力を持つ男である。だが彼が新たな長に選ばれることはなかった。

彼は実力も人望もあった。誰もが彼が長になると思っていたが、実際には遥かに実力の劣る彼の兄が選ばれた。理由は彼の父親――つまり前の長にしかわからない。

つまるところ彼は腐っていた。自分こそが長になると思っていたというのに、どうして何もかも劣る兄が選ばれたのか。口にこそ出さないものの、心の内に不満の言葉や感情が渦巻いているのは誰の目にも明らかだ。

そして今、彼は一族に伝わる秘宝が祀られた一間にいる。一間と言ってもそれは地に敷かれた絨毯に祭壇と共に飾られているため、部屋ということはない。

祭壇に祭られる星の紋章が印された外套（マント）、星の印が刻まれた盾、そして星の柄を持つ剣。いずれも創造神より贈られたこの里の秘宝であり、同時に世界平和の礎にもなっている神器である。

これらを目にして、男の脳裏に僅かな悪意が首をもたげた。

自分の価値を理解できない里の連中になど――。

――ならば余に従え。

ゾデアの頭に邪悪な声音が響き渡った。同時にその身体が邪な意思によって支配される。

次の瞬間彼はその秘宝を掴み取りそしてその場から消えた。

これより後およそ三十年、世界は暗黒に包まれる――。

——レビック暦五百六十六年

0章2：片鱗

平和ってなんだろう、と今になってふと思う

よく親父から聞かされたおとぎ話は、魔物という化け物のせいで世界中しっちゃかめっちゃかになってて、でも運命とかに導かれちゃったりなんかした人たちのおかげでそいつらはいなくなったって内容だったと思う。

俺はそういう話信じてなかった。大体俺たちの生きてる世界なんて小さな島の中だけ、他のところがどうなってて何が起こってるのかなんてこと、正直興味もなかった。今が楽しければよかったんだ。小さい弟はそういうメルヘンとかファンタジーに目を輝かせて聞き入っていたけれど。

お話の終わりはいつも、悪い神様がやっつけられておしまい。魔物はいなくなって、世界に平和が訪れました。めでたしめでたし。

だから、平和ってなんなだろうって思うんだ。

魔物がいないことが平和？そんなこと、あるもんか。

そんなことがあるって言うなら、俺たちがこんな目に遭うなんてあるわけがない。

「おにいちゃん・・・こわいよぉ・・・」

弟がぎゅ、と俺の身体を抱き締めてきた。

「・・・大丈夫、大丈夫だよ・・・。大丈夫だから・・・」

内心ちっとも大丈夫じゃないと思いながらも、こいつを少しでも安心させるために俺はしっかりとこいつを抱きすくめた。

頭上にある天井を通して響いてくるのは、モノを壊したりとか人の悲鳴、あるいはガラの悪い怒鳴り声とか、そういうものだ。あと何かが燃える音も。

何が起こったのか、最初はまったく理解できなかった。親父とお袋が血相変えて帰ってきたと思ったら、俺とこいつをこの地下室に閉じ込めて出て行ったのだ。最後に聞いたお袋の言葉は、静かにな

るまでここに隠れていなさい、だった。
　その後から今の今まで、こんな状況だ。俺はなんとなくだけどわかった。俺たちが暮らしてきたこんなちっぽけな村を、何かが襲っているんだってことを。それが何かはわからないけれど、俺は魔物だと思った。どうしてとは思うけど、きっと魔物に理由なんてないと思うんだ。
　そのうちに上、というか外が静かになった。静かになったから、俺たちは外に出てみた。きっと、親父もお袋も、普段一緒にバカやってるみんなも無事で、魔物は追い返せたんだって思った。でもそれは全然違って。
「・・・・・・っ！」
　地下室から出てきた俺たちが見たものは、炎に包まれた村だった。とっさに俺は俺にしがみついている弟の目を手で覆った。こんな景色、こいつには見せられない。でもそれだけ。俺も声が出ない。身体が動かない。この恐ろしい光景がどうにも目に焼きついて、立ち尽くすことしかできない。
「・・・おい、こんなところにまだ生きてる奴がいるぜ」
　俺はその、聞いたことのない声で我に返った。振り返ればそこには、大き目のサーベルを片手に握ったいかにも悪そうな男が二人、並んで俺たちを見下ろしていた。
「本当だ。どうする？」
「どうするって・・・これくらいなら結構な値で売れるだろうし、殺すのはお頭が許しゃしねぇだろ」
「それもそうか。面倒だけどしょうがねぇな」
　何の話をしているのだろう。まだ、生きてる奴が、いる。結構な値で、売れる。嫌な想像しかできない。
「おいお前ら、おとなしくしろよ。そうすりゃ命だけは助けてやる」
　次の瞬間、俺たちはその屈強な男どもに捕まって縄でぐるぐる巻きにされて担ぎ出された。もちろん出来るだけの抵抗はしたつもりだけど、所詮子供の俺たちにどうにかできるはずがなかった。弟の

泣き叫ぶ声だけが俺の耳に届く。
「お頭、まだ二匹ほど残ってやしたぜ」
しばらくして俺たちはその男がお頭と呼ぶ、これまたサーベルを持った男の前に転がされた。思わず見上げたその男は、よく見ると眼帯で左目が隠れていた。
「そうか、よくやったな」
冷たくて淡々とした声だった。俺の知ってる人間の声とはとてもじゃないけど思えない。本当に俺たちは人間に襲われたのだろうか。人間の姿をした魔物なんじゃないかと思えてしまう。いいや、そうとしか思えない。そうだと思いたい。
「それよりお前ら、こいつらが最後の生き残りだ、止め刺しとけ」
お頭と呼ばれている男は俺たちをちらりともせず、俺たちを連れてきた連中にそう言った。その時俺は気がついた。そこにいたのはまぎれもなく――。
「おとうさん！おかあさん！」
弟の叫び声が自分のものではないかと錯覚して一瞬ドキッとした。でもそれ以上に俺の心臓は止まりそうだった。そう、そこには親父とお袋だった。変わり果てた二人の姿。この叫び声にも反応しないから、生きてるかどうかもわからない。
けれど次に起こった出来事はそれ以上に俺の心臓を・・・いや、全身を凍りつかせた。
二人の男が振り上げたサーベル。その白銀に光る刀身が、肩から上のまあるい物体を跳ね飛ばした。
俺は、何も、出来なかった。
俺は、何も、何も、何も、なにも、ナニも。
「うわあああああぁぁぁぁぁぁあーーーーッッ！！！」
その叫び声は、俺のものではない。けれど、全てを代弁した悲痛な叫び。耳を劈くその叫びは、普段怒ったこともない小さな小さな弟の身体から発せられていた。
ドバッ、と得体の知れない音が響き、隣に転がっていた弟を縛る

縄がはじけとんだ。その勢いをまともに食らって俺は地面を転がる。転がりながら辛うじて見えたもの。それは――。
「なんだこのガキ・・・おい、おとなしくし――」
「うわあああぁぁっ？！」
「ひいぃぃっ！？」
「あああああぁぁぁーーーーッッッ！！！」
――瞳に焼きつく星。星の中心で光り輝く、あいつ。
「――クルーティぃーっ！！」
あいつは応えない。今のあいつの口から出るものは言葉でも、音ですらない呪文。
星の鼓動と共に、暴走した魔力が巨大な閃光を伴って爆発した。
「――ッ、ク――テ――」
自分の叫びも聞こえないくらい真っ白な時間に押し流されて、俺はそのまま沈んだ。

その日南海の孤島イナートから上がった蒼い光の柱は、世界のあらゆるところからも見えるほど巨大で激しいものだったという――。
――レビック暦五百七十七年

0章3：別れ

二人目と三人目の子が生まれた。どちらも男児。実にめでたいことだ。既にある長男は、生まれながらに身体に欠陥のある身。また紋章も持たぬ資格のない存在。それに対し新たに我が一族に加わった双子は完全だ。これで家臣たちの世継ぎ問題に乗じた騒動も収まることだろう。

「父上、名はいかがいたしましょう」

長男が弟たちを嬉しそうに抱き上げながら私に言う。妻が子を身ごもった時すぐさま廃嫡を申し出るほど聡明な彼を世継ぎに出来ぬのは正直心苦しくはあるが、先祖代々の掟の手前仕様がない。

「そうだな・・・二人もいると少し手間取るな・・・。そちも共に考えい」

「・・・いい、のですか？」

彼は私の言葉に嬉しさと驚きを混ぜ合わせた複雑な笑みを見せた。それに答えるように私はゆっくりと頷いてみせる。

「よし、な、お前ら待ってろよ、俺がお前たちの名前、考えてやるからな」

彼はそう言うと、抱いていた弟を乳母に預けて私を促した。紋章の儀も終わっている。私は後を侍女たちに任せて自室へと下がった。

双子の名を考えるに当たり、上の子を私が、下の子を長男が考えることとなった。翌朝早くには命名の儀を執り行わなければならないので、今宵は夜を徹することとなりそうだ。長男も自室に篭ってさぞ頭を悩ませていることであろう。果てさてどのような名を持ってくるであろうか。

やがて夜は更け、ひとまず私は名前をいくつかに絞り込んでいた。そこに誰かが扉を叩く音が割り込んだ。

「誰だ」

「陛下、一大事でございます・・・」

聞きなれた大臣の声。
「入れ。一大事とは何事だ」
「はい、実は・・・」
身を低くして答える大臣の口から出た報告は、私の心胆を凍りつかせるには十分すぎるものだった。
「・・・赤子が・・・さらわれただと・・・？！」
「はい・・・」
私はその瞬間駆け出していた。思えばこうして走るのはどれだけ振りだろうかと一瞬思えたが、それもすぐに吹き飛んだ。双子が眠っているはずの部屋に足を踏み入れてみれば、そこには鐘も割れんばかりの大声を上げて泣く双子の片割れと、窓際で頭を垂れて立ち尽くす長男、そして暗く沈んだ侍女たちだった。
「・・・どういう・・・ことだ・・・」
私が来たことを確認した息子はすぐに私の足元に跪き。
「申し訳ございません！俺の、俺の力が足りないばかりに・・・！」
よく見れば、彼の全身には火炎か雷、どちらかによるものか判断しかねる無数の焦げ跡がついていた。そしてこの言葉を加味して、私は彼が何者かを撃退しようとして返り討ちにあったらしいと推測した。
「・・・よい。その方のミスではない」
「しかし父上！」
「よいと言っているだろう、何も気にすることはない」
「・・・・・・」
彼は唇を噛み締めているようだった。
「・・・ひとまず、このことは内密に運べ。幸い双子であることを知っているのは今ここにいるもののみ・・・くれぐれも他言は無用ぞ」
「・・・はい」
「・・・・・・」
彼は、それに対しても無言だった。

後々になって聞いてみれば、邪悪な気配を感じ取った彼は剣を片手に単身乗り込んだそうだ。その時彼は、双子の片割れを抱き上げる、上半身しかない老人の姿を見たという。浮遊するその老人は、制止し、更に弟を取り戻そうと立ち向かった彼に上級魔法を撃ち、そのままその場から消え去ったという。

それがもし本当であるならば、その老人は魔物ということだろうか。最近になって僻地から魔物らしきものの出没報告が多々上がっているが、まさかいきなり城の、しかも深いところまで入り込んでくるとは思いもしなかった。

これは創始者の時代から魔物、ひいては邪神と因縁ならぬ関わりのある我が王家に対する攻撃だと見て相違あるまい。かくなる上はこの身が朽ち果てようとも戦い続けなければ――。

――後クレセント暦二千五百七十二年

1章1：帰星

夜空に輝くのはまるで翠玉のように美しく、真珠のような真円を持つ月とそれに従う点のような小さな光。澄んだ空気が心地よく、それはそよ風のように流れて彼のうなじを優しく撫でた。

美しき夜を迎えた今宵の星は、年に一度の世界の日。この世界が始まったとされる原初の記念日。貴方達の世界で言えば、クリスマスや花祭りに相当するこの日、どこの家でも厳かで質素な晩餐会が開かれていることだろう。そして人々は今日という時間を生きていられる喜びと感謝を込めた祝詞を神に捧げる。

そんな日にあって、ただ一人それを行おうとしないものがいた。別に金銭的に余裕がないわけではなく、ましてや異端者であるというわけでもない。強いて言うのであれば、精神的な余裕がないと言ったところだろうか。

彼――厳密に言えばこれは相応しくない表現である――の名前はクルーティ。貿易と漁業で栄えるこのマレナにあっては名門と呼ばれる貴族、アストラル家の嫡男である。とは言っても既にアストラル家の当主もその連合いも共に亡く、実質的に彼がこの家の跡目を継いでいると言っても過言ではない。

そんな彼が一年でもっとも重要な宗教行事を行うことなくひたすらに夜空を眺めているというのは、いささか名門と呼ばれる家の当主には相応しくないことである。彼はただ夜空を眺め、眺めてはため息を漏らしてうつむき、そしてうつむいたと思えば夜空を眺め・・・を繰り返している。

「・・・『世界の日』なんて・・・キライだ・・・」

この世界の誕生を祝う日にあって、世界に対する呪詛を吐けるような人種は罪人や異端者以外には滅多にあるものではない。だが彼は、ためらうことなくそれを口にした。それはまるで自分を排除するかのように扱ってきた世界への怨嗟に他ならない。

彼は孤独だった。両親は既に亡い。彼がまだ幼い時分に――彼は今でも十分幼い顔立ちをしているが――、魔物によって殺されている。そして、他に家族はいない。近所づきあいはもちろんあるが、こと世界の日に関しては例外である。この日に他の家と交わる家はない。故に、この日こそ彼にとっては一番孤独を痛感させられる日なのである。

「何か起これば いいのに・・・。おとぎばなしにあるような、奇想天外な・・・」

抱えた膝に頭を乗せ、彼は再びつぶやいた。だが、すぐにそれを打ち消すように続ける。

「・・・なんて言ったら・・・不謹慎、だよね・・・」

理解はしていた。彼の明晰すぎる頭脳を以ってすればそんなことは容易である。だが、だからといってそれを受け入れられるかどうかは別である。ましてや、あらゆる意味で多くの悩みを持つ彼には現実とは受け入れがたい生き地獄と言っても過言ではない。

「・・・お誕生日くらい・・・。・・・誰かと・・・いたいなぁ・・・」

そう。彼が孤独に打ち震えるのはこの日こそ彼が生を受けた日であることも少なからず関係している。

今日を以って彼は齢十七となる。その決して長くはない人生の中で、独りで過ごした誕生日は十を越えるのだ。

寂しい。彼の心中にある想いはそれだけだった。そして、願わくばそれを解決してくれる何かが起これば――。

チカッ。

「・・・？」

微塵に等しい願いを胸に見上げた夜空に、一条の光が走った。それはそのまま大きな光に包まれたまま、夜闇に沈む星の空を彷徨う。

この世界は通常、世界そのものをさして星と呼ばれる。このため

夜の空に散らばる小さな光は宝(ほう)と呼ばれ区別されている。
「・・・らく・・・ほう・・・？」
落宝(らくほう)とは即ち流れ星を差す言葉だが、答えは否。引力の存在するこの世界にあって、光を保ったままふらふらと上空を彷徨う流れ星などあるはずがない。そしてそれはその仮説を自ら否定するかのように、突風に灯火をかき消された蝋燭(ろうそく)のごとくふっと消えた。
「・・・・・・？」
気のせいだろうかと、彼はそのままの姿勢で空を見上げながら首をかしげた。だが、それは気のせいなどということは断じてなかった。轟音と共に地鳴りが響き、月明かりさえもさえぎって彼のいる庭園の上空に巨大な何かが出現した。
「わわわ、わーっ？！」
とっさに彼はその場に伏せる。その間もその何かは轟音を響かせて上空を通過し、そして――。

ドガアアアアアアン！！

轟音と地響き。それは地竜の咆哮のごとく地平線を走り、遠く天(てん)嶮(けん)グラスラクの山脈をも揺らした。
しばしの静寂が訪れ、やがて硬直していた彼はのろのろと身を起こした。
「・・・な・・・何なのさぁ・・・」
その顔には不安ばかりが浮かんでおり、身を起こした状態のまま再び彼は金縛りにでもあったかのようにしばらく硬直していた。
彼がその金縛りから解かれたのは、数分経ってからだった。教会関係者や野次馬根性を発揮した住民達が集まってくる喧騒が聞こえたのだ。
とりあえず動かないと――。彼はようやく普段より重く感じる身体を奮い立たせてのそりと立ち上がった。
「クルーティさん、何事ですかな？」

白い口ひげあごひげをたたえた老司祭が民衆の先頭に立って、全員の思いを代弁するようにクルーティにそう尋ねた。そうは言われても当然彼にわかるはずはないのだが。

「・・・わかりません・・・」

言いながら、彼はこの騒ぎの原因ともいえる巨物のほうに振り向いた。

「・・・はあ・・・」

そこにあったのは、小屋一つくらいの大きさの巨大な岩だった。ところどころ黒く焼け焦げているのは恐らく空気を切り裂いたためだろう。そしてそれはアストラル家庭園の大半を抉り取り、そのままそこに居座ってしまっていた。

「・・・どうしましょう・・・」

「うーん・・・」

腕を組んで老司祭は唸り声を上げた。世界の日に墜落するという余りといえば余りの理不尽さに、一同完全に打ちのめされていた。とはいえその巨岩は特に何かを起こすわけでもなく、ましてやモンスターが中から出てくるなどということはないようだ。それが時間差で発生しないという保障はもちろんどこにもないが。

しばらく考え込んでいた老司祭だが、このままでは埒が明かないと判断したのだろう。懐から護符を取り出すと、その巨岩に貼り付けて何やらもごもごとつぶやいた。

すると淡い光がその巨岩を包み込み、そのまま吸い込まれるようにして消えた。

「ひとまず封印と結界の魔法を張りました。詳しくは明日以降調べるとしましょう」

そして彼はクルーティたちに振り返って確認するように頷いて言った。

「はあ・・・」

老司祭が魔法を施したことで一同はとりあえず安心したのか、振り返りつつだったりしばらくその場に留まったりしていたが、徐々

にその場から離れていった。最後に司祭が軽く会釈をよこして立ち去り、再びそこはクルーティ一人だけになる。
「・・・・・・」
人々が消えてからも、彼は半ば呆然とその巨岩を眺めていた。こんな大きなものを自宅に放置されたというのもあるが、やはり物珍しさが優先する。
「・・・どこから来たのかなぁ・・・」
元々彼は未知のものに対して好奇心が抑えられないタイプである。性格のせいでそれを表に出すことはあまりないが、今は自分しかいない。彼はまるで吸い寄せられるかのようにその巨岩へと触れた。
この時、全ての歯車が回り始めた。それは現実的にも扉という形で彼に道を開いた。具体的には、巨岩の一部が音を立てて開いたのだ。
「・・・え・・・？」
それはまさに扉だった。ごつごつとした表面が突然奥へと入り込み、そしてそのまま口を開いた。その先にあるのは薄暗い空間。外から見てもいかにも何かがありそうな雰囲気をかもし出している。
「・・・人工物なの・・・？」
恐怖はもちろんある。元からして童顔の彼がおびえている表情はまるでお化け屋敷ですがる相手のいない子供のようであるが、やはり好奇心が勝ったのだろう。彼は恐る恐るその巨岩の中へと足を踏み入れた。
「・・・う・・・わぁ・・・」
そこは思わず声を漏らしてしまうほど、まるで見た目とは違っていた。水が湛えられた噴水のような水路が周囲を取り囲み、その中央は祭壇のようにやや高い。そしてそこには何らかの魔導具と思しき大きな水晶があった。
もはやここが何らかの目的を持って造られた人工のものであることは火を見るより明らかであり、それはますますクルーティの好奇心を刺激した。

やはり一番興味が惹かれるのは高台となっているところにたたずむ水晶だ。彼はそれを見つめながら、ゆっくりとそこへと上がっていった。

「・・・、あ、あれ？」

そこで彼は気がついた。ちょうど灯台の下が暗くて見えなくなっているように、水晶と段差の死角となって下からは見えなかった所に誰かが倒れていた。

「わ、わわっ、大丈夫ですかっ？！」

彼はは慌ててその何者かに近寄って声をかける。近寄ってみればその何者かは普通の人間であり、赤い髪を持つ男のようだった。だがその男からは返答はない。

耳を近づけてクルーティは呼吸などを確認してみるが、どうやら死んでいるわけではないらしい。目立った外傷は特にないが、恐らくは気絶しているのだろう。

「ど、どうしよう・・・。と、とりあえず運び出さないと・・・」

だが、意識のない人間ほど重いものも滅多にない。

「んん・・・っ、んー・・・っ！」

おまけにその男の背格好はクルーティよりも大柄だ。非力な彼がその男をかつぎ、かつ自宅の客間へと運び込むまでには相当の時間を必要としたのだった。

1章2：出会い

扉は閉じた。まるでクルーティたちが出るのを待っていたかのように、計算されていたようなタイミングで。とはいえ、それに気づくだけの余裕は彼らには存在しなかった。

アストラル家の邸宅は、やはり名家と評されるだけはあってこの街の中でもひときわ大きなものである。しかし当然のことだが、一人で生活するには巨大すぎる。

「よ・・・い、しょ・・・っと・・・！」

客間のベッドに男をようやく寝かせることができたクルーティは、だいぶ息が上がっていた。

一方赤髪の男は、やや投げ出されるように寝かされてもまだ目を覚ます気配がない。ひとまずクルーティは男が帯びていた剣を外して机に置くと、応急処置をするため道具を取りに階下へ降り、そして戻ってきた。

外傷がないことを改めて確認し、熱などの内的な異常を確かめる。とはいえ彼は医療に関する知識は基礎的なものしか持ち合わせていないので正確な判断を下すのは難しい。

最後に念を入れ、傷や身体の不調を治療する魔法をかけておく。こちらに関しては彼の専門。その精度や錬度、適切さは、まるでそちらのほうが魔法であるかのようだ。

だが、その魔法を行使する彼の手がふと止まった。ありえないものを見たかのようにその顔は驚愕の色に染まり、手は動揺に震えている。

その赤髪の男の顔は、多少の差異はあるもののクルーティのそれと似通っていたのだ。

「・・・お・・・お兄・・・ちゃん・・・？」

そう言いはしたが、彼はすぐに首を振った。それはありえないことだと、わかっているから。なぜなら兄を亡きものにしたのは――。

「・・・・・・っ」
彼は無意識のうちに震えていたことを悟り、自分の身体を抱き締めた。
赤髪の男は、未だに目覚めない――。

同時刻。
この世ともあの世ともつかない不可思議な空間で巨石が夜空を切り裂くのを静観していた男たちがいた。
「・・・遂に・・・始まってしまうか・・・」
銀色の長髪を持つ長身の大男がつぶやいた。彼の身体は線が細く、しかしその肉体は鍛え抜かれたものであることがわかる。その上顔立ちは端正で、どこか影のあるその様は美男子と言い切るに十分過ぎるほどあった。
一方で彼の耳はまるで針葉樹のように尖っていた。その身体的特徴を持つ人間など星には存在しないはずだが、この場所が果たしてどこであるのかわからない以上ある意味では問題ではないのかもしれない。
傍らには三日月のような船に乗った青い身体を持つ妖精のような女性と、無垢な翠緑の瞳と頭髪を持つ少年。どちらもやはり耳は尖っている。少年は心細いのか、男の服をしっかりと握ってどこか不安げな表情をしている。
「ククク、やっと、じゃねぇか。何をそんなに悲観的になってやがる？」
銀髪の男の隣の豪奢な椅子に腰掛けた筋骨隆々とした男――ただしその外見はデミヒューマンじみている――が高揚感を隠そうともせずに言い放った。そして非常に緩慢な動作で立ち上がり両腕を開く。
「人間をやっと、好きなだけぶっ飛ばせるようになるんだぜ？楽しみで仕方ねぇ・・・」
言葉と共に、その野獣のような男は下卑た笑みを浮かべて舌なめ

ずりをする。てらてらと光る粘液がまとわりついたその舌が口周りを舐めまわし、そこを不快な粘液で湿らせた。
「・・・下手な演説は遠慮願おうか・・・」
汚物を見るような眼で男を見ていた銀髪の男を代弁するように、今まで影に溶け込んでいるように中空に浮いていた老爺がはねつけるように言い切った。
禿頭にレンズのような瞳と高い鷲鼻、そしてやはり針葉樹のような尖った耳が印象的な老爺は、上半身だけの存在だった。下半身は深遠の闇が渦巻くのみで、外套の中は空虚である。
老爺の言葉を受けて、野人はあからさまな舌打ちを漏らして荒々しく椅子に座った。その瞬間に椅子が悲鳴を上げる。
「・・・・・・」
銀髪の男はこれらのやり取りを終始眺めていたが、やがて大仰に外套を翻して踵を返した。彼の髪色を劣化させたような灰色のそれが空を舞う。
「どこへ行くのかね？」
彼の背中に、老爺のしゃがれた声が突き刺さる。しばらく男は足を止めて黙っていたが、顔だけ動かして後ろの二人に眼を向けると低い声で短く答えた。
「・・・仕事だ・・・」
それだけ言うと彼は、傍らの二人を促し、他の二人から逃げるかのように足早でそこから立ち去った。瞬間、闇に溶けるように彼らの身体はそこから消えていた。
「・・・ケッ、相変わらずいけ好かねぇ野郎・・・」
唾を吐き捨てるように、いや、実際掃き捨てながら野人は言い放った。
「・・・水と油じゃな」
「あァ？」
まるで皮肉めいた老爺の言葉にそいつは睨みながら振り返るが、既にそこに老爺の姿はなかった。

「チッ・・・」
野人の大きな舌打ちだけがそこに響き渡る――。

同時刻。
夜空を切り裂いた巨石を森の中で見た男がいた。
「・・・落宝(らくほう)か・・・珍しい」
つぶやきと同時に男は剣を高速で振るう。ひゅひゅ、とそれは風を切り裂き、同時にその先にいた異形たちを一刀の元に両断した。その瞬間それらはその場から消えるように消滅する。
男はしばらく周囲を警戒していたが、やがて周りに敵がいないと認識して剣を鞘へと収めた。
かしん。その際に発せられる乾いた音がやけにはっきりと響き渡った。そして彼は髪をかき上げながら今宵の空を見上げる。
「・・・アーサー様が言っていたな・・・世界の日はあらゆる始まりの日だと・・・」
空だけでなく、周りの空気も静かだった。彼のつぶやく声がやけにはっきりと響いていく。
「まあ、俺にはどうでもいいが・・・」
そう最後につぶやくと、彼は大仰に外套(マント)を翻して踵を返した。森においてはまるで保護色のような深い緑のそれが空に舞う。
それと同時に彼の長めの赤髪が動きに合わせて揺れ、その瞬間彼が左耳に着けた星の形をしたイヤリングが静かに煌いた。

2章1：始まりの始まり

浮かぶ光景は全部セピア色だった。即座に彼は気づく。これは夢であると。

現実で起こったことなのか、それともただ記憶の連鎖による荒唐無稽な夢なのかの区別は今の彼には出来そうもない。

『・・・ゃあ行っ・・・くる、・・・・・・ク、後のこ・・・は任・・・たぞ』

夢の中の彼――まるで霧に包まれているのように姿がぼやけている――が言う。だがその言葉は、まるで刻まれてしまったテープを再生しているかのように途切れ途切れだった。それは彼が既にこの光景を忘れかけているからだろうか？それとも、やはりこれがただの夢であるからなのか？

やはり、彼に区別することは出来ない。出来そうもなかった。

『ああ、任せ・・・おけ・・・、グロウ。・・・死ぬな・・・な。生・・・て・・・ってこ・・・よ』

彼に話かけられた、鎧を身に着けた青年――彼とは違い耳が尖っている――が彼へと言葉を返した。そして、右手から下げていた古びた剣を彼へと差し出す。

『・・・って・・・』

『・・・・・・のか？こ・・・は親・・・さんの・・・』

彼はその差し出された剣をまじまじと見つめ、そして青年の顔へ視線を移した。青年はゆっくりと首を振ると、自分に言い聞かせるように、静かに言った。

『気・・・すん・・・。ど・・・せ・・・・・・使って・・・・・・・・る人・・・に・・・っててもたほうが・・・剣・・・幸・・・だ・・・うよ』

『・・・かった』

しばらく彼は何かを考えているようなぼんやりとした視線を向け

ていたが、やがて青年からその古びた剣を受け取った。それはすぐに既にあった剣と寄り添うように彼の腰から下げられる。
その後二人はお互い不敵な笑みを浮かべると、どちらからともなく背を向け合った。そして青年はゆっくり地面を踏みしめるようにして彼の元から去っていく。
やがて青年がいなくなると、そのいなくなった方向から何か重いものが落ちた音が響き、周囲は薄闇に包まれた。
『よし、行くか』
ノイズが晴れた。同時に夢の彼を包んでいた霧も晴れ、彼の意識からもその姿が見えるようになった。
燃えるような赤髪と赤眼は自信に満ちた灯火を宿している。大分整っていると言って差し支えのない顔の口元には不敵な笑み。腰から下げられた二本の剣はいずれも太い長剣で、彼が騎士であろうことをうかがわせる。
彼は目の前にあった水晶へ手を伸ばすと深呼吸を一度行い、そして先ほどとは変わり緊張した面持ちでそれに自身の魔素を送り込んだ。
するとそこが律動を始めた。やがてそれは彼が立っていられないほどに大きくなり、次いで彼は上へと跳ね上げられるような感覚に襲われる。そこが上へ移動しているのか判断する間もなく、さらに大きな衝撃がそこと、そこにいる彼を襲った。
そして衝撃はピークを迎え、彼の意識をも奪い去った――。

気づけば朝のようだった。薄いカーテンから差し込んでくる日差しは暖かく、今日の天気はいいらしい。
最初に彼の眼に飛び込んできたのは大分高い天井だった。しばらくそのままの状態で彼はぼんやりとしていたが、やがてのそりと身体を起こした。
その時、跳ね上がる布団と共に何か暖かいものが彼の手の上に滑

り落ちてきた。彼が思わずそちらへ眼をやれば、そこには彼が今先ほどまで寝ていたベッドに顔を伏せて寝ている青髪の少年――クルーティの姿があった。彼の手に乗ったのは、少年の手と見て間違いないだろう。

「・・・・・・」

彼は、自分の傍らで静かな寝息を立てているクルーティを起こさないようにそっと体勢を整えてやると、やはり彼を起こさないように静かにベッドから降りて伸びをした。

「んー・・・・・・っ、とっ」

気分は悪くない。むしろいいほうに分類されるだろう。どうしてこんなところにいるのかには疑問符がつくが、それはとりあえず気にしないことにする。

周囲を確認してみると、そこは広い部屋だった。ベッドは先ほどまで使われていた一つだけだが、装飾や調度品の具合や配置のされ方からここがゲストルームであると理解できるくらいの知識を彼はなぜか持ち合わせていた。

「・・・ん・・・」

暇をもてあまし気味に外の景色を見ようと窓に近寄った彼に反応したかのように、少年が小さな声を上げた。彼がややどきっとして振り返れば、ゆっくりと顔を上げて彼のほうに眼を向けるクルーティと眼が合った。

しばらく二人は沈黙していたが、やがてクルーティのほうがその沈黙を破って声を出した。

「気づかれたんですね、あの・・・えっと・・・ご、ご飯、用意してきますから・・・」

それだけ一方的に言うと、彼はいそいそと部屋から出て行った。彼はその後姿をやや呆然として見送っていたが、どうやら自分は空腹であるらしいということに気づいたのでテーブルについて食事を待つことにした。

待つことしばし、やがて扉が開いてクルーティがパンやジャムな

どが盛られたバスケットと暖かいミルクが注がれたマグカップをお盆に載せて入ってきた。
「あの、お待たせしました、ごめんなさい」
「・・・いや、別に気にしてないからさ」
食卓となったテーブルをちらちらと見ながら、彼はクルーティに手を振った。それを見たクルーティは、くすっと笑うと、小さくどうぞ、と彼へと食事を促した。
しばらく、その部屋には静寂が訪れる。

「・・・あー、うまかった」
口をナプキンでぬぐいながら、彼は満足げにつぶやいた。
その様――というか食事している様――をどこか嬉しそうに眺めていたクルーティはにこっと笑って片付けに取り掛かる。
「よっぽどおなか、すいてたんですね」
くすくすと笑いながらもクルーティはてきぱきと食器などを片付ける。それに対して彼は腕を組んで反対方向を向いた。
そしてクルーティは、それらを持ってしばしその場から外し、やがて茶器などを持って戻ってきた。
「・・・えっと、今さらですけど・・・ボク、クルーティ、って言います」
小さく会釈して、彼は紅茶をまだ反対方向を向いている彼の前へと差し出す。
「・・・ん、あ、わり」
紅茶を受け取り早速それに口をつけて彼は言う。それから改まり、クルーティのほうを向いた。その雰囲気に、少しだけクルーティは残念そうな表情をしたが、すぐに元の表情に戻して彼の次の言葉を待つ。
「俺は・・・」
それだけ言って、彼は言葉を詰まらせた。その様子にクルーティが怪訝な顔をする。

「俺は・・・えっと・・・誰だろう・・・」
ぼそっと、彼が言った。しばらく正真正銘の静寂がその部屋を支配した。
「・・・あれ、ちょっと待て、マジでわかんねぇ、俺・・・俺は・・・」
「・・・え、ええっ、もしかしてき、記憶がない・・・とか・・・？」
がしがしと頭をかきながら悶える彼を前に、クルーティはおずおずと声をかけた。帰ってきたのは言葉ではなく、多分そういうことになるよなぁと言いたげな、彼の赤い瞳だけだった。
「・・・あ、ま、待て、待ってくれ、今なんか浮かんだ！」
頭を抱えたまま彼はがばっと身を起こした。その脳裏に、セピア色の光景がフラッシュバックする。先ほど見ていた夢だ。あるいはもしかするとこの夢は記憶の断片か。彼はそう思いながら夢の中で出てきた言葉を一つ一つ噛み砕くように頭の中で反芻する。
しばらくして、やがて彼は一つの言葉へと行き着いた。
「・・・ぐ、グロウ・・・グロウ？・・・グロウだ・・・俺の名前はグロウ・・・」
「・・・グロウ・・・さん？」
やはり頭を抱えたまま、彼はグロウと名乗った。自信の程は欠片もなさそうだったが。
「・・・よくわからん。よくわからんけど、とにかくそれが浮かんだ」
ため息をつきながら、彼は頭を抱えていた手をゆっくりと下ろして頬杖をついた。
「・・・あの・・・ってことは昨夜のことも何も・・・？」
「昨夜？」
クルーティの言葉に、彼は頬杖を離して少し乗り出し、何かあったのか、と付け足した。
「ゆ、昨夜、あなたは空から落ちてきた大きな岩の中にいたんです・

・・ひょ、ひょっとしたら記憶がなくなっちゃったのはきっとそのときの衝撃で・・・」
乗り出してきたグロウに気圧されているかのように、彼は少し身を引き両手を身体の前にして言葉を選んでいるように少しどもりながら答える。
彼の言葉を聞いたグロウはしばらく硬直していたが、やがて自分の頭を叩き椅子にもたれて天井を仰いだ。
「そりゃ記憶もなくなるわ・・・なんなんだ俺って・・・」
ははははと力のない笑い声を上げる彼に、クルーティはどう言えばいいのか判断しかねているようだった。またしても静寂。
だが、やがてグロウはそんな雰囲気を吹き飛ばそうと大げさな声を上げた。
「ま、どうしようもないなー」
「・・・え、で、でも・・・」
「だってそうだろ。こうなったらもうしょうがねぇよ」
すっくと立ち上がって窓に近寄ると、グロウはカーテンを開けて外を見る。
「・・・本当に・・・大半のことが思い出せねぇ。かといっていつまでも人様の家にいるわけにもいかないし・・・」
まぶしそうに外を眺める彼の後姿に、クルーティは立ち上がると慌てた声を上げた。
「ぼ、ボクのコトだったら気にしないで、どうせうちには誰もいないし、迷惑だなんて思ってないし、それにそれに・・・」
まるで遠くへ行く親にすがる子供のように言う彼にグロウは半分笑いながら振り返る。その赤い瞳は笑っていて、からかうようにクルーティを見据えていた。
「あ・・・え、えと・・・」
それを見て、彼は違うというかのようにぱたぱたと両手を振った。そしてそのまましぼむようにして座る。それを見て、グロウは弾けたように笑い出した。

クルーティは赤くなってうつむきながらぼそぼそと抗議する。
「わ・・・笑わないでください・・・」
対してグロウは、涙目になりながら腹を抱えていた。
「悪い悪い・・・お前面白い奴だな。・・・まあ、色々とありがとうな。なんとかやってけそうだ」
彼はまだくすくすと笑っていたが、その笑顔は優しく、決して嫌味なものではなかった。
「・・・あの、グロウさん・・・」
「敬語はやめろ」
クルーティが何かを言おうとしたのをさえぎって、グロウは彼のほうへ歩みよった。そして彼は続ける。
「俺が何者かわからないし、歳だってわかんねぇんだ。ヘンに気使わなくていいよ。そのほうが俺も気が楽だ」
な、と言い聞かせるように言って、そして彼は笑った。
「う、うん、グロウ・・・あのさ」
「んー？」
椅子ではなくテーブルに腰掛けて、グロウは顔をそちらに向ける。
クルーティは彼が自分のほうを向いたことを確認して、またしゃべりだした。
「・・・この後、どうするつもりなの？」
「そうだな・・・」
クルーティの問いかけに、彼は腕を組んで窓のほうへ視線を向けた。陽射しが差し込んでくるそこからでは外の景色はわからない。だがその瞳は見つめている。消えてしまった己の姿を。
「・・・とりあえず、俺が何者でどこから来たのかくらいは知りたいな・・・」
「・・・・・・」
つぶやくようにして言った彼の横顔を見つめながら、クルーティは言っていた。
「・・・あの、さ・・・」

「あん？」
「・・・ぼ・・・ボク、道案内くらいならできるよ」
何が彼にそう言わせたのか。運命や必然などという言葉でくくるのは簡単だが、彼にとってはそのような単純に片付けられるものではない。
彼は直感的に思ったのだ。自分によく似たこのグロウと名乗る青年は、やはりあの時以来会うことのないあの人なのではないかと。郷愁や懐古と呼べる感情、恐らくはそれなのだろうと同時に思いながら。決して自分に向けられた対等で飾らない態度に心が躍ったわけではないと、言い聞かせながら。
「・・・おう、頼むわ」
そして、グロウは屈託のない笑みを返した。自分にはとてもできないくらいにまぶしい彼の笑顔をクルーティはしばらく見つめ、それからなぜかちくりと痛んだ胸を押さえながらぎこちなく笑った。

2章2：旅立ち

そこは、この世ともあの世ともつかぬ混沌とした場所だった。景色らしい景色はなく、ひどく虚無。それはもはや景色ということすらおこがましい。

そんな空間にぽつんとひとつだけ存在する、足場。周囲をストーンヘンジのように巨大な石の柱が円を描くようにして林立している。そしてその丁度中央に、二つの人影がある。片方は黒く長い髪をなびかせる額に第三の眼を持つ、三つ目の男だ。第三の瞳以外の二つの眼は酷く空ろで、瞳孔が開ききっているが。

方やそんな男の前に傅く一人の男は、目の前の男とは違う、針葉樹のような耳をもつ銀髪の男だ。

「・・・ではまだ動くおつもりではない、と・・・」

「・・・そうだ・・・」

冷ややかに銀髪鬼を見下ろす三つ目は、その視線のような冷たい声音でもって答えた。そして静かに背を向ける。

「・・・まずは余の肉体を全て開放することこそ先決・・・連中はまだ捨て置いて構わぬ・・・」

「・・・御意」

「・・・それからアーサー・・・」

三つ目が振り返ることもせずに言った。アーサーと呼ばれた男は、身じろぎすることなく次の言葉を待つ。

「・・・お前は出るな・・・。星と月は他の二人に任せた・・・。お前は狭間に残り、シフォンの育成を続けろ・・・。・・・以上だ」

「・・・畏まりました」

アーサーは傅いたまま、さらに頭を下げた。そして静かに立ち上がると、外套（マント）を翻してその場を後にする。その足場から一歩足を踏み出した瞬間、彼の身体は闇に溶けてその場から掻き消えた。

一方そこに残った三つ目は、空ろな瞳で虚無な空間をじっと見据

えたままそこから動こうとしなかった。ただ一瞬だけ、口端を大きく歪ませただけで――。

空は雲一つない快晴で、まばゆい日差しが降り注いでいる。水面はそんな日差しを乱反射させ、下からも強い光が飛んでくる。海鳥たちも元気なようで、上から降ってくる日差しには彼らの鳴き声がたくさん含まれていた。

「港町か・・・」

人気のあまりない港で海の向こうを眺めながらグロウはぽつりとこぼした。

「何か思い出せそう？」

その隣で視線だけ彼に向けてクルーティが問う。だがグロウはその問いにいいトコまで来た気はするけど、と答えてただ首を小さく横に振った。

「そっか・・・。・・・この街で何かきっかけになるかもって思ったところはこれで全部なんだけど・・・」

「まあ自分の名前すら忘れてるような重いヤツなんだし、そう上手くいくことはないわな」

やれやれ、とさらに付け加えながら、グロウは足を海に投げ出す形でその場に座り込んだ。

「・・・それじゃやっぱり、他を当たってみるの？」

言いながら、グロウにあわせるようにしてそこへいわゆる体操座りをするクルーティ。グロウはんー、と気のない返事をしながら彼のほうを向いた。

「けど、海は行ったばっかなんだろ」

「ん・・・まあ。早くてもあと十日くらいは・・・」

「となると、必然的に陸を行くしかないわけだ。準備しないとな。・・・まあでも――」

「・・・？」

クルーティが首を傾げると。
「――もう少しこのままでいようぜ。・・・うん、風が気持ちいい」
背伸びをした態勢のままグロウはそのまま後ろにゆっくり倒れ、横になった。彼は加減を知らない日差しを手のひらでさえぎりながら、子供のように笑った。
その姿を見ていたクルーティはしばらく唖然としていたが、くすりと小さく笑うと彼に習うようにしてそこに寝転んだ。小さくまぶしいー、という声が漏れる。

「クルーティ、ここから最寄の街はどれくらいなんだ？」
「今の時間に出たら丁度日暮れすぐくらいかなぁ。とりあえずあんまり遠くはないよ、今日は天気がいいから多分ここからでも見えるし」
「そりゃまたえらく近いなおい」
すぐ近くの店先に陳列されている果物のほうに顔を向けながらグロウは言う。そして、じゃあ別に食料はそこまで用意しなくてもいいか・・・などとつぶやきながら果物から眼を離した。
「飲み物はボクんちでも用意できるし・・・あとは・・・何かいるものあるかなぁ」
「薬とかかな。あとは護身用に武器ってところか。なあ、お前は何ができる？」
「え？えっと・・・一応剣は少し・・・。あと、魔法なら得意・・・かな」
「魔法か・・・。じゃあ魔素（マナ）補給物資もいるだろ。俺は・・・えーっと、まあ、多分剣は得意なんじゃないかな」
自分が持っていた二本の長剣を思い出しながら、彼は苦笑いした。
「あ、いっけない、忘れてた」
「おお、なんだなんだ？」
突然の声にグロウは眼を丸くして足を止める。今まで並んで歩い

ていたのが、クルーティだけ一歩前に出た形だ。彼はグロウのほうに振り返って、言う。
「出かける前に一言言っておかなきゃいけない人がいるんだ」
「保護者か？」
言いながら彼はまた歩き出した。すぐにクルーティの隣に並ぶことになるが、クルーティは歩き出さずに彼の背中に向かって抗議する。
「ボクもう子供じゃないよ！」
「そういやお前、何歳？」
「十七歳！」
首をひねって後ろに振り向きながら聞く彼に、ぷいとそっぽを向きながらクルーティは答えた。
彼のセリフにグロウはしばらく硬直していたが、やがてゆっくりと彼のほうに向き直った。そしてまじまじと彼の顔を見つめながら。
「・・・それ、マジか？」
「本当だよ！・・・グロウ・・・ボクのことどれくらいだと思ってたの？」
「いやあ・・・悪い・・・」
そして後ろ頭をかきながら、グロウは続きを口にする。
「ちょっとでかい十二とかその辺りだと思ってた」
商店街に、クルーティの全力で否定する声が響いた。

「着いたよー！王都レスティナス！」
そこは堅牢な城壁で街全体が囲まれた重厚な街だった。その深部、山を背にする形でさらに王族が住まう宮殿がもう一度城壁に囲まれてそびえ立っている。それらは夕陽の残り香に染まり、夜の空気の中で橙色に濡れていた。その二重に連なる壁の、一つ目をくぐりながらクルーティは振り返った。
「・・・本当に近かったな・・・」

彼の後ろで荷物を抱えながらグロウは城を見上げた。そこではいくつもの旗が風の中静かに揺れていた。
「でしょ」
くすっと笑ってクルーティは返す。
「こんだけ近いところに行くのにもお前はいちいち許可いるのか・・・？」
「・・・うん・・・」
冗談半分で言ったグロウに、クルーティは気恥ずかしそうに顔をそらした。
「・・・マジかよ。過保護だなー、あの人」
夜の帳が下り始めたばかりの空を眺めながら、グロウは苦笑する。彼の脳裏には、旅に出ると報告に来たクルーティに全力で反対するおばさんの姿が浮かんでいる。
「ボクのお父さんとお母さん、忙しくて昔からあんまり家にいなかったから・・・」
「にしても、お前もう十七なんだしあれは行きすぎだろ、常識的に考えて・・・」
グロウの言葉にクルーティも苦笑するしかない。事実は事実なのだ。
「・・・それよりさ、グロウ。今日の宿を探そうよ」
「あいよ、了解」
荷物を抱えなおして、彼らは街の中へと消えていく。直後、刻限を知らせる鐘が鳴り響き、悲鳴を上げながら城門がゆっくりと閉まった。

アルセルン王国は、世界の南側に存在するフレウフレ大陸全体を統治する世界で最も大きな国である。千年の歴史を持つ由緒正しき国家であり、その覇は世界中にとどろいてなお余りある。北に教皇あり、南にアルセルンありといわれるほどにその権威は高い。

「この街は世界中の色んなモノが集まってる国際都市だから、もしかしたら何か思い出せることがあるかも」
窓を開けて身を乗り出しながら夜景を見ているグロウの隣でクルーティは説明する。
記憶をなくしているグロウは、この世界で最も有名な都市のひとつすら覚えていなかった。彼が覚えていることといえば、儀礼的な作法や日常において支障をきたさない程度の言葉くらいで、知識的な会話を行うにはいささか不便であった。しかし魔法やあるいは魔素などに関する事柄に対する知識はクルーティも舌を巻くほどに高度な分野まで身に着けており、その差にはただただ驚くのみだ。
「・・・星がきれいだな」
「え？」
夜空を見上げて言った彼の言葉に、クルーティは思わず頓狂な声を上げた。
星。彼は今、あの天空に浮かぶ緑色の真円を星と言ったのか？
星とは彼らの住むこの世界そのもののことだ。夜空に浮かぶ宝の群れを星と呼ぶことは決してなく、またその中に浮かぶ巨大な天体が星と呼ばれることもまた決してない。
「何言ってるの、あれはお月様だよ。星は今ボクたちがいるここだよ」
笑いながら訂正を入れる彼に対し、グロウは驚いた顔で振り向いた。
「え、マジで？・・・あれ、おかしいな・・・」
「・・・・・・」
しばらく二人はお互いを見つめていたが、やがてグロウがその場にゆっくりと腰を下ろした。
「どんだけ記憶がぶっ飛んでるんだ俺は」
「ううーん・・・」
頭をかきながらクルーティを見上げる彼は、ひどく困惑しているようだった。クルーティは彼にかける言葉を必死で探すものの、そ

の状況に陥ったことのない彼にはそれらしい言葉は浮かんでこなかった。

その日その時刻より僅かに後。そことは少し北のとある街の宿の前に一人の男がいた。風雨と寒さをしのぐ外套（マント）と帽子で包まれたその姿から彼がどのような姿をしているのかうかがい知ることはできない。帽子から垂れる赤い髪と、そこから覗く赤い瞳以外は。

みぞれ交じりの雨はびゅうびゅうと唸り声を上げる風にあおられて、彼の身体を冷やしつくしている。だが中は暖かい空気に満ちているらしく、窓の内側は白く曇りがかっていた。その宿の中からは併設されているらしい酒場で陽気に騒ぐ男たちの声が沸いてくる。

男は宿屋の扉に手をかけたまま、瞳を閉じて何かを考えているようだった。しかしやがて心は決まったのかゆっくりとその扉を開き中へと入る。

カウンターにいた執事風の姿をした男は彼にすぐに気づいて居住まいを正して丁寧に頭を下げた。一方男は雨風を避けるために纏っていた外套（マント）や帽子を手で少し掃うと、ゆっくりとカウンターに向かってそのテーブルに腕を乗せる。

「どうも今晩は、ええーっと、お一人様で、よろしいでしょうか？」

「・・・出来れば騒がしくない部屋がいい」

男はその問いに頷きながら、低い声で答えた。その声はひどく落ち着いており、外套（マント）に包まれた顔から発せられたにしてはいやによく響いた。

「と仰られましてもねェ・・・今日は船が着いたばかりだから人のいない部屋と隣接してる部屋なんてありませんよ」

「・・・出来れば、と言った・・・」

「・・・すいません。ではよろしければこちらにご記帳を」

差し出された宿帳に名前を書き込むと、男は差し出されたカギを荒々しく受け取って階段を上っていく。その拍子で周囲に雨水が散

り、彼の歩いた道順を示すかのようにのたりのたりと続いていく。
「おぉっと?!・・・なんだお前?」
階段を上りきったところで、彼は誰かとぶつかった。その誰かはでっぷりと太っており、豊かなあごひげを蓄えている。その男を彼は横目でちらと見ると、小さく非礼を詫びてその場を立ち去ろうとした。
「おい!人にぶつかっておいてそれだけか?!」
だがそのひげの男は彼の肩を掴むと、無理やりに彼を自分のほうに振り向かせた。
「・・・なんだ」
彼は冷ややかに男を見つめた。その態度が癇に障ったのか、男はさらに声を荒らげた。
「そんなぐっしょ濡れの外套(マント)なんかつけたままぶつかりやがって、この落とし前はどうしてくれるんだ、あァ?!」
そして男は彼の胸倉を掴んでにらみつけた。
「・・・ゴミめ」
だが、男は彼と目があった瞬間がたがたと震えだした。真っ赤なその瞳は冷たく男を射抜くような眼光をたたえている。それはまるでここではないどこかで重ねてきた幾万もの夜を練りこめたかのように燃え盛っていた。
真っ青になって震える男の手を払いのけ、同時に彼は裏拳を打ち込みながら踵を返した。男はそれをかわすことができるはずもなく、直撃を食らって階段を転げ落ちていった。
階段を落ちた男が、それに気づいた人たちに支えられて起き上がった頃には、既に彼の姿はそこにはなくただ彼が歩いていった水滴のあとがあるだけだった。
そして男は周りの連中に言う。
「あ・・・あいつは・・・人間じゃねえ・・・!あんな、あんな眼・・・人間に出来るわけ・・・。あい、あいつは・・・人間のツラした悪魔だ・・・!」

いつの間にかみぞれ交じりの雨は勢いを増し、がたがたと窓のガラスが悲鳴を上げる。その刹那、赤い稲妻が嵐の夜を切り裂いた。

2章3：友として

レスティナスの広い街を、荷物袋を背負い地図を片手にグロウは歩いていた。陸路を取るに当たって山を越えねばならないため、その下準備を整えているのだ。

フレウフレ大陸は東西に穿たれている。中央を南北に走る天嶮（てんけん）グラスラクは、それ自体雲をつくほどの高さを備えているわけではない。しかしその山々は間断なく陸に敷き詰められているかのように大陸の東と西を完全に断絶させているのだ。

王都レスティナスと海洋都市マレナは大陸の西部に位置している。彼らは陸路を行くがため、東部へ渡るにはこの山をどうしても越えなければならないというわけだ。

「でかい事故の翌々日に山越えってなぁ・・・」

地図を扇子のようにして顔を仰ぎながら、彼は独（ひと）り言（ご）ちた。そして。

「・・・あいつ何してんだか・・・」

城門の反対側、小高い山を背に立つ城の尖塔のほうに振り返った。

クルーティは今朝、山越えの準備をグロウに任せて城へ向かった。一般人がそうそう簡単に城に入れるはずがないとグロウは思ったが、彼は一応貴族であるらしい。城内に入ることを咎（とが）められることはないという。

だが今という状況で城に行く理由などどこにあるというのか。グロウのその問いには彼は笑って答えようとしなかった。

しかし、彼が城に向かってからもうしばらく経つ。そろそろ正午と言って差し支えない。昼食をどうしようかと考えつつ、グロウは再び歩き始めた。

渡り廊下を歩きながら、この歴史ある重厚な雰囲気は数年で変わ

るものでもないのだと、クルーティは改めて思う。初めて城に上がったのは八年くらい前だったかと思うが、あの時感じた重々しさ、そして窮屈さは今になってもちっとも変わらない。今日彼が上がったとき、既に朝見は終わって様々な立場の人間達が慌しく動き回っていたが、今はそういうこともなくひんやりと静まり返っている。彼が廊下を歩く音だけが静かに響くだけだ。

彼は尖塔をゆっくりと昇る。だんだんと街が、眼下に小さくなっていくのが螺旋階段を一回りしていくたびに実感できた。

「・・・・・・」

真下をうっかり覗き込み、彼は思わず身震いをする。こんなとんでもないところに呼び出すなんて、相変わらずとんでもない王様だと思ってしまう。頂上にある部屋にたどり着いてみれば、そこにある扉は穿たれておりそこには金糸や銀糸の縫い取りも豪奢な、赤いガウンを外套（マント）のように羽織り冠を頭上に戴く青年が彼を待つようにして立っていた。

その青年はクルーティの顔を見ると、ひどく嬉しそうな顔をして、けれど何を言えばいいのかよくわからないらしく複雑そうに顔をゆがめた。

「大変遅れてしまい、真に申し訳御座いません。このクルーティ、弁解のしようもなく・・・」

彼の何かを言い出せそうにない姿を見て、クルーティはその場に跪いて頭を垂れた。その姿に青年は慌てて彼のすぐ前にかじりつくと、困ったように次々と喋り始めた。

「だっ、もう、そういうことするなって言ってるだろう。やめてくれ、俺にそういうことをするのは。ほら、立ってくれ、頼むから、な」

「・・・はい」

そのあまりの慌てぶりに、クルーティは思わず口に手を当ててくすくすと笑った。そして彼がいつまでも笑っているので、青年は気恥ずかしそうに顔をそらして頬をかいた。

「変わらない、ね。フィリップ」
「・・・あー・・・」
フィリップと呼ばれた彼は久しぶりに呼ばれた自分の名前を確かめているようにクルーティのほうに顔を向けると。
「悪かったな、どうせ変わらないさ。・・・久しぶりだよなぁ、どれくらいだろう？」
「・・・二年、かな・・・」
ゆっくりと立ち上がって窓の外に眼を向ける。フィリップと呼ばれた彼も立ち上がって冠を取り下ろした。
「あーあ、まったく。堅苦しいったらないんだよ毎日。こんなもの似合うわけもないし・・・」
「・・・王様になってもう四年じゃない、いい加減慣れようよ」
「こういうのはさ・・・俺よりも絶対お前のほうが似合う似合う」
彼は外した王冠を、あろうことかクルーティの頭に掲げようとした。それを見て、彼はすぐに手を振って後退（あとずさ）る。
「やめてよ、無闇に冠を他人につけようとしたらダメだってば」
そして王と自分が呼んだ相手に、腰に手をあてて指差した。
「フィリップは王様になったんだから、責任から逃げちゃダメだよ」
「・・・相変わらず言ってくれるなあ」
くく、と笑って彼は冠を頭に戻す。そしてに、と笑顔を作った。
「うん、でも似合ってないのはそうかも」
「それは思っても言わないでくれよ？！」
そして二人は声を上げて笑った。ひとしきり笑って、それからその場に向かい合って座り込んだ。
「あーあ、お互い変わらないな」
「そうだね」
「それにしても、どうしたんだ？今日はびっくりしたぞ」
ひらひらと手を振るフィリップ。
「ん・・・、ちょっとね。・・・旅、することになって」
「ああ？・・・え、お前が？」

「そんな顔しないでよ・・・一人でじゃないよ、二人。実は・・・」
かくかくしかじか、と彼は語った。そのある意味荒唐無稽な話に、フィリップはしばらく言葉を失っていた。
「お前って奴は本当に・・・」
「・・・なぁに？」
がしがしと頭を無造作にかきむしりながらようやくひり出た彼の言葉は。
「あいっかわらずお人よしの塊なのな！」
呆れたような、それでいて楽しそうな色をしていた。
「・・・ご、ごめん・・・でも・・・」
「・・・あ、いや別に謝らなくてもいいんだけどよ。・・・でも？」
彼に続きを促されて、クルーティはどこか物憂げに窓から空を見上げた。穏やかな青い空が、彼の青い瞳に映り込んでいる。
「・・・彼・・・お兄ちゃんに似てるんだ・・・」
「兄貴」
「うん。人違い・・・だとは思うよ、でも・・・どうしても他人って気がしなくって・・・」
「・・・そう、か・・・」
彼にとって、その答えは意外だった。二の句を紡げなくて彼は黙り込んでしまい、しばらくそこは沈黙に満たされた。どこからともなく鴉のしゃがれた鳴き声が聞こえてくる。
「・・・あ、ご、ごめんっ、なんか雰囲気重たくなっちゃって！」
突然取り繕うようにクルーティは上ずった声を上げた。明るく元気そうなその声が、わずかに震えているのをフィリップは聞き逃さなかった。しかしそれでも、彼がそれを指摘することはない。そこに触れることは、この唯一の親友の顔に哀しみの色を塗りたくってしまうと知っているから。
「まーそんなわけで、しばらくこの辺りからいなくなるからさ！・・・ひとまず挨拶に来ようかなって思ったの」
「そいつはいい考えだな」

くく、と小さく笑ったフィリップは、その後で少し不満そうな、寂しそうな表情を浮かべた。
「けど、またしばらく会えねえんだな。・・・戻ってきたら報告兼ねて寄ってくれよな？」
「うん、もちろん！ごめんね、この二年間ろくに手紙も書かなくってさ」
「いいんだって。俺のほうも余裕なかったしよ、・・・」
そこでふと彼は言葉を切って何気なく隣のクルーティの顔を見た。当然、なに？と言っているかのような青い視線を彼は受けることになる。
「・・・その・・・言いにくいんだが・・・」
「いいよ、どんなこと？」
彼は視線を落としたが、すぐに戻して言った。
「・・・魔法研究所に復帰するつもり、ないか？」
「・・・・・・！」
クルーティは、凍りついた。
魔法研究所とは文字通り、魔法を専門に扱う正式な役所の一つである。様々な種類のある魔法をより高みに導くために、あるいは魔法を用いた道具を作るために、あらゆる研究を重ねる部署だ。以前クルーティは、この部署で働いていたことがある。
世界最高の魔導士育成機関であるレイロール魔導学校を主席で卒業した身でありながら、上役とのトラブルで彼は自らその職を辞したのだ。
「まるで祝ってるみたいな言い方だけど・・・あいつは死んだ。半年前の実験事故でな。・・・責任はあっても有能な奴がいないんだよ、今のうちには」
「・・・ごめんけど・・・」
そう言って顔を伏せながら力なく首を振る彼の姿を見て、フィリップはもう何も言わなかった。いや、言えなかった。そして内心舌打ちをする。やはりこれは言うことじゃなかったよな、とつぶやき

ながら。
　再びやってきた沈黙が破られるのは、もう少しだけ先のことであった。

「ごめんっ！ホントにごめん！」
　宿屋に戻って開口一番、クルーティは深々と頭を下げてそう言った。
　あれからさらに話が弾んでしまい、フィリップを探しに兵士たちが尖塔に上がってきたことで辺りが夜の帳に包まれており、顔を上げれば翠緑に輝く月とこれでもかと言うほどに対面することができる時間だと二人は知った。当然フィリップは大臣にこってり油を絞られることになり、クルーティはそそくさと退廷することになった。
　そしてグロウと合流するために宿屋に着いたときには、既に食事の時間も過ぎていた。
「・・・いや、んな頭下げなくても」
　言っても顔を上げようとしないクルーティに困った表情を浮かべながらグロウは頬をかいた。彼としては、別にそこまでされなくても一言だけでもあればそれでよかったのだが。
「だって・・・準備全部まかせっきりにしちゃって・・・おまけにもう夜だし・・・」
「だからいいんだっつーの。あれだろ、きっと懐かしい話に花が咲いたんじゃないのか？」
「・・・う・・・うん・・・」
「んなこったろーと思った。いいよいいよ、そういう付き合いってのは大事にすべきだと思うしよ」
　な、と言い聞かせるようにグロウはクルーティの頭をなでた。予想外の対応にクルーティは一瞬びくっと縮こまるが、すぐに赤面を浮かべて上目遣いにグロウを見やりながら抗議の声を上げる。
「・・・こ、子供じゃないんだから・・・」

「ん、あ、悪い」
当のグロウはほとんど無意識のうちだったらしい。クルーティに言われてぱっと手を離す。
「・・・も、もうっ」
抗議の音を上げながらも、クルーティはずきりと胸が痛むのを感じていたが、それがどういうものなのか知る術は持ち合わせていなかった。
「悪かったって。・・・で、明日はどうするんだよ？」
悪びれもせずに肩をすくめながら彼は問うた。急に方向の変わった話題にクルーティは一瞬全身の力が抜けかかったのか、かくんと首を落とした。
「・・・天気見て、悪くなかったら夜明けと同時くらいに。・・・ホントなら今日にでも出発できたんだろうケド・・・」
後半は、すごくばつが悪そうでぼそぼそとつぶやくような大きさだった。

3章：確たる幻

彼女は、今日もため息をつく。

この寒村に虜囚の身となってどれくらいが立つだろうかとふと考えてみる。だが、同時に過ぎ去った時間の勘定をしても、実に詮ないことであると彼女は思いなおしてそれをやめた。確たることは、こんなところでくすぶっていることは、彼女の若々しい使命感が許さないということ唯一つだ。

来る日も来る日も、邪神の呪法を使いこなす亜人（ゴブリン）にその特異な力を酷使され続けることは、悪い意味では修行になっていると言えなくもない。だが、彼女の華奢な体内に脈打つ、穢れ無き夢見の血は、それを決してよしとするはずがないのだ。

それは、人間どころか精霊にも数えることが出来ないほど遥か遠い時代に神より授かった、神域の民だけの特別な祝詞を宿している。

神聖なその血筋は、邪悪を憎み、邪悪を消そうと彼女の身体を駆け巡る。それは、理性と旧（ふる）い英霊たちとの闘いであった。

彼らは決して邪悪に屈することを潔しとしない。その意志は闘争心へと結びつき、彼女の心を奮い立たせる。だが、彼女はそこで足を止める。彼女には今、肝を嘗めねばならないだけの理由があるから。

遠い時代を生きた英霊たちとは違う。あらゆる苦境を生き抜いてきた歴戦の勇者たちとは違う。今を生きる彼女の身体が刻んだ年月は僅かに十五を数えるばかりなのだ。

――足りない！

心の内に秘めたそれは、やがてつぶやきとなって彼女の心に波紋を投げかけ、さらに叫びとなって全身を振るわせる。

叫ぶことは必要としない。彼女に今必要なのは、純粋に力のみであった。

だから彼女は陽炎の幻を、刹那の夢を見続ける。大いなる神域の

民は、夢幻の刹那に祝詞を紡ぎ上げ、やがてそれは魔素(マナ)を通じて大樹に届き、大樹は神へと願い奉る。神は竜を介して世界を夢幻の刹那の内に創り上げられる。

神は決してお答えになりはしない。だが、神は必ずお応えになってくださる。

だからそのお応えがいかようなものか彼女に知る由などあるはずもない、けれども彼女には、お応えが必ずあることを知る権利を持っている。

故に彼女は、待つことにした。神に祝福された聖なる御子、大いなる世界の子を。それは、悪しきものどもが跋扈(ばっこ)する世界からの嘆願、それに対する神が下されたお応えに他ならぬ。

そして彼女は、今日もため息をつく。

どうしてこんなことになったんだろう、とクルーティは今になって頭の中で自問する。それは今この時にはまったく必要の無い思考であると思っていても、彼はそう問いかけずにはいられなかった。

思えば二日前、天嶮(てんけん)グラスラクの山頂にある小さな旅篭町で少女の声を聞いたのがきっかけだ。

その少女は鴉の濡れ羽色のように艶やかな黒髪の中に、翼があしらわれた金色の額環(サークレット)を戴いていた。その少女が二人の夢枕に立ち、助けを求めていた。呪亜人(メイジゴブリン)に襲われた村を助けてと、ひたすら懸命に。その切々とした訴えは続き――気づけば朝となっていた。

付き合いは数日しかないが、グロウがどのような人間なのか大体クルーティは判ってきていた。

彼は、熱血漢だった。自分ではあまり気づいていないようだが、困った人を見ると助けずにはいられないし、敵と戦う時は率先して盾になろうとする。そんな彼がこの夢を見て、助けないはずがないのだ。

二人は旅籠で必要なことを手早く済ませて山を下り、街道を外れ

て森を歩いて目的の場所を発見する。そして今、彼らはここで息を潜めているのだ。
自分の少し前で、まばらになった――それでもまだたくさんある――木々の影に身を潜めながら更に前方を警戒しているグロウの背中を見て、クルーティはなんと大きくて、頼もしい背中だろうと思う。しかし今、ここにいるのはそのグロウがためでもあるのだ。
確かに彼は頼りになる男に違いない。けれども命が危険にさらされるかもしれないようなことに当然のように首を突っ込む姿を見るにつけて、どうしてもクルーティは自問せざるを得ないのだった。当然それに対する答えなど出るはずもないし、出す気もない。その代わりに、彼は小さく息を吸い込み、そして吐いた。
「クルーティ、見ろよ」
当のグロウはそんなクルーティの気持ちを知ってか知らずか、そう言って小さく手招いた。無言でそれに従いグロウの横に身をかがめて進むと、言われるがままに先ほどまでグロウが見ていた方へと目を向ける。
既に日が落ちて久しいため、その先に何があるかうかがい知ることは困難だが、闇に目が慣れた彼らにとっては仲間のいない、炎霊石の街灯が昼間の太陽のようだった。そしてその明かりに照らされているのは、どう控えめに見ても裕福とは言えない粗末でこまごまとした家達である。
「時間が時間だけに、こっからじゃ村がどうなってるのかよくわからないな・・・」
片膝をついた姿勢でグロウは目線を村のほうへ向けながら言う。
「でも呪亜人（メイジゴブリン）たちの姿は見えないよね・・・やっぱりわかりづらい場所にあるからあまり警戒してないのかな」
「・・・かもな。けど逆にこっちにとっては好都合だ。行こう」
それだけ言うとグロウは、ゆっくりと立ち上がって腰の剣――二本あったうち、ごくごく一般的だった長剣は置いてきた――の柄に手をかけた。記憶には無いが、やけに彼の手に馴染む剣である。

彼は、自分を見ていたクルーティが立ち上がるのを確認するや否や、音を立てないように足元に注意を払いながら村へと歩き始めた。そのすぐ後を、クルーティがまるで従者か何かのように付き従う。そんな彼の腰にも、剣――グロウのものとは違い、一般的なサイズの霊銀（ミスリル）製――が佩かれていた。

彼女は此方と彼方の境をさまよいながら、此方の様をぼんやりと眺めていた。赤髪の騎士が、青髪の剣士を伴って彼女の元へと向かってくる。呪亜人（メイジゴブリン）のあまり厳しいとはいえない監視を潜り抜けながら、彼らはゆっくりとだが確実に進んでいる。

驚くべきは赤髪の騎士。心得のない人間には容易に扱えぬ、重厚な騎士剣を軽々と使いこなしながらも足並みや呼吸は一切乱れていない。そして敵に繰り出す剣撃は、寸分の狂いなき必殺の一撃ばかりだ。

彼女は夢見の内にありながらほう、と嘆息を漏らした。

彼女の育った神域に、剣の使い手はいないのだ。連綿と続く神域の血に、剣の技術は必要ないから。薄皮一枚此方から離れたところから、此方にお告げを下すその血に、強力（ごうりき）は必要ない。故に、そこに剣の使い手などいない。

剣士というのも存外格好いいものだなと、彼女はうっすらと思った。そしてそれから、いけない、と意識をすぐに彼らに戻す。

騎士達はなおも進みゆく。気配を消す術にも長けているのだろうかと彼女はぼんやりと考えてみる。彼女から見える地点にいた呪亜人（メイジゴブリン）の一匹が、悲鳴を上げることなく事切れ、そして静かに消滅して――その場に微量の貨幣（コイン）が転がった。

魔物は死ぬと金銭を残して消滅する。血も、肉も、出はするが死ぬとそれも消滅する。だが、彼らがなぜ死んだ瞬間金と成り果てるのか、それはまったく解明されていない。それは謎以外の何物でもなかった。

騎士たちは貨幣（コイン）には目もくれない。ただ、暗闇の廊下を暗殺者の如く滑り、目的の場所だけを目指して止まらない。
彼女には見えた。彼らが、二匹の呪亜人（メイジゴブリン）を倒す姿を。
彼女には聞こえた。彼らが、そこに踏み込む音が。
彼女には感じた。その身に宿る神域の血が、その聖なる鼓動を。
そして、彼女は此方へ戻ってきた。夢幻の力を宿す清明な紫紺の瞳が開かれ――自分を呼びかける二人をしっかりとその目で見た。
「・・・・・・、おい？」
赤い髪の騎士が言った。そして彼女は、自分の身体を揺さぶられるのを感じて、はっきりと此方の感覚を取り戻した。
「・・・ん。おはよう」
彼女の実に的を外れた言葉に、騎士はあっけに取られたがすぐに取り繕うと改めて向き直る。
「大丈夫か？助けに来たぞ」
「・・・ありがとう。グロウ、クルーティ」
きらりと輝く紫紺の瞳に射抜かれて、騎士、グロウは愕然とした。彼は彼女に、なんの情報も伝えていないはずだというのに。
「驚いた？」
くす、と笑って彼女は言う。
「別に読心術じゃないわ。あんたたちの名前は、神様が教えてくださったの」
くるりと指を回して見せながら、そしてにっと笑って見せた。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
その姿を見て、二人とも言葉を失った。あの、切々と助けを訴えていた少女はいなかった。そして彼女は腰に手を当てて、宣言するかのように二人へ言う。
「あたしはシファム。シファム・ゼルフォースよ。よろしくね、二人とも」
二人は、唖然とするしかなかった。

ミシュレンディアは、他の下っ端よりも一回り大きい身体を小刻みに揺すりながら悪趣味に飾られた杯を傾けた。口に広がる葡萄酒（ワイン）の味は、彼に封じられた辺境伯の位がいかに他と比べ矮小なものであるかを象徴するかのようだった。しかしどれだけ質が悪かろうと、それは彼の頭にかすかな酩酊を覚えさせるくらいのことは可能らしい。

彼には理解できていた。こんな寒村を任される程度では自分の器は高が知れていると。自分たち呪亜人（メイジゴブリン）は、これ以上高い次元に昇ることができないのだと。この小さな村を支配するくらいの能力しか与えられていないのだと。

そんな絶望的なことを知りながら、それでもミシュレンディアには主たる邪神に逆らうことなど出来はしない。未だ復活を遂げていない邪神を相手取ることすら不可能なくらいにその実力は遠くかけ離れているのだ。

だから彼は、自らの器相応の領地で安酒を浴びるくらいのことしかやることがない。

こんな生活を甘んじて受けるくらいならば、いっそのこと人間と刺し違えて死んだほうが、まだいくらか華々しいものではないか。そう考えながらミシュレンディアは部下が注いだ葡萄酒（ワイン）をたちまちのうちに飲み干し、それから名手と激しく剣戟を舞う己の姿を想像して虚ろな笑みを浮かべた。

その直後。さほど大きくもない部屋の、豪華とは決して言えない扉が勢いよく穿たれた。何事かと、ミシュレンディアはその巨体を思わず浮かせてそちらを見た。途端にその粗末な椅子が悲鳴を上げる。

彼の視線の先には、赤髪の精悍な顔つきをした騎士らしき男を中心に、男か女か一見判断しかねる青髪、そして、夜露に光る鴉羽色の頭髪に黄金の額環（サークレット）を戴く少女がいた。その少女を、ミシュレンデ

ィアは知っていた。だがそんな馬鹿な、奴はずっと軟禁させていたはずだ――。
ミシュレンディアはそう考えた直後、すぐにその愚考を改めにたりと不敵な笑みを浮かべた。そうだ、これは自分という闇が輝ける唯一にして最後の機会なのだ――。
騎士――グロウは、その不遜な態度が癪に障ったのか剣を抜き払って彼に突きつけながら低い声で言った。
「貴様が親玉か」
返答次第ではすぐに斬られてしまうかなと思いながら、ミシュレンディアは言う。怒りに燃える騎士の赤い瞳から目を逸らさずにはっきりと。
「いかにも、名はミシュレンディア。・・・わしの束の間の楽しみを邪魔した罪は重いぞ？」
「よくも言えたものね」
少女――シファムが一歩進み出る。
「あんたたち、今まで散々してきたことがなんだかわかってないなんて言わせないわよ」
その紫紺の瞳を見たとき、ミシュレンディアは心を焦がされているのを感じる。間接的に、自分が聖域に足を踏み入れているかのような錯覚は、邪悪そのものである彼にはまさに毒であるに違いない。
だが、彼はその瞳を見ていたいと最近思う。いや、その瞳に飲み込まれてしまいたいと、思うことすらあった。いっそその聖なる色に染まってしまえればどれほど楽だろうかとも。
しかし彼にそれは許されない。彼がすべきことは唯一つ。
「知らんな」
杯を椅子の傍らに無造作に置いて立ち上がると、更に続けた。
「元よりわしらは判り合えることなど出来ぬ。問答は無用じゃ・・・行くぞ人間ども！」
言葉も終わらぬうちに、ミシュレンディアは両手を用いて左右別々の印を組んだ。その印から、炎の飛礫（つぶて）と氷の刃が人間たち目掛け

て飛び出す！
人間たちはミシュレンディアのその姿を見るや否や、三方向に散らばって戦闘態勢を取った。ミシュレンディア配下の子分達は、それに続くかのように慌てて武器を構える。彼は内心で舌打ちを漏らしたが、それを表に出すことはなかった。
ひゅひゅ、と風を斬る音がミシュレンディアの耳に届いた。安酒の酩酊は既に無く、それに対する反応は完璧だった。
ギャアァァン！耳障りな金属音が部屋に響いた。燭台に浮かぶ明かりが、勢いよく揺れた。
彼は見た。交錯する二振りの剣の真向かいで燃える、赤い瞳を。
「さすがに、親玉を名乗るだけはあるな」
グロウの言葉に対し、彼はただにい、とだけ笑うと更に印を組んだ。刹那グロウはそこから消え、雷(いかずち)が虚空を薙いだ。二股ほどの距離にいる敵を認め、ミシュレンディアはもう一度笑った。そしてそのまま、彼は言う。
「お主、名をなんと申す」
段平(だんびら)を正眼で構えながら言う彼に対し、グロウは片手で長剣を持ったまま全身の力をすっかり抜いて立っている。
「・・・名は忘れた。今はグロウと名乗っている」
言いながら、彼は背後から奇襲をかけようと忍び寄っていた一匹を振り返りざまに、まるで舞うかのように優美に斬り伏せた。ぎゃん、と断末魔の悲鳴を上げてそいつは消滅した。間違いない。素晴らしい剣の名手である。
「白熱(グロウ)して輝く、か。良き名じゃ」
ミシュレンディアは喜びに打ち震えていた。遂に来たのだ。ようやく花を咲かせる時が。
「わしの助けは無用じゃ。他のものに専念せよ」
彼の持つ段平(だんびら)が、ぎらりと光った。
「さあ来るがよい、騎士グロウよ！」
魔素(マナ)を練る気は既に失せていた。剣に対しては剣にて応えるが礼

儀。ミシュレンディアは、踊り子とでも見紛うほどに優美に跳躍して襲い来るグロウを迎え撃たんと跳び上がった。空中で二つの刃が、甲高い音を響かせて交差した。
両者の着地は、同時だった。だが、グロウが己(おの)が剣を鞘に収めたその瞬間――ミシュレンディアの身体は静かに床に倒れ伏せた。
立ち上がったグロウは、紅蓮の血を滴らせて立ち上がろうとするミシュレンディアを振り返る。その近くでは、その部下達が嘆願に応えた神により焼き尽くされていた。
「・・・み・・・ごと・・・」
ごぷ、と泡立つ血を吐き出しながら彼は言った。這いずるようにようやく立ち上がった彼の前に、グロウが立ちふさがる。だがその手に剣は握られていない。
「あんた、なんで魔法を使わなかった？」
次の言葉は、ミシュレンディアにも予想できた。だから彼は、血に塗(まみ)れた唇を目一杯釣り上げて、答えた。
「・・・お主とは・・・剣だけで・・・闘い・・・た、かった・・・それだけよ・・・」
彼の体が、徐々に消えていく。そしてやがて彼は、黄金色に輝く貨幣(コイン)となって、床に落ちた。
『次があるなら・・・違う形で・・・相見えたいものよ・・・』
グロウの耳には、ミシュレンディアの声が残って止まなかった。

外伝1：魔人

彼はぎしぎしとあちこちが痛む身体を無理やりに持ち上げると、至極不快そうに後頭部をかきむしった。それにあわせて左耳に着けられた星型のイヤリングが揺れ、赤い髪の毛が数本抜け落ちる。それから、ろくに遮光も出来ない薄手の窓掛（カーテン）を開け放ってしばらく外の光景を眺めていた。

そこにあるのは、夜明けを迎えたばかりの青い空。そして、その下には切り立った崖によって隔てられた草原が広がっている。彼は、グラスラク山脈の頂近くで旅人を待つ旅篭町、エディックにいた。

「・・・・・・」

雨風を防げるだけましと考え格安の値段で選んだ宿だったが、やはり多少の無理をしてでももう少し上等の旅籠に泊まるべきだったようだ。身体の節々がひどく痛む。もちろん、熟睡できたはずもない。これならばいっそのこと、普段通り野宿をしたほうが幾分かましかもしれなかった。

重い身体を簡素な木組みの寝台（ベッド）から引き摺り下ろすと、あまり期待は出来そうにない朝食を求めて部屋を出た。そして、やはり期待に沿うものが朝の食卓に並ぶことはなかった。

それは非常に陳腐なパンケーキが二枚と、水の入った杯が並ぶだけの、過ぎるほどに貧相なものだった。彼は顔をしかめたものの、不満を口には出さず、ひとまずそれらを平らげた。生憎と食うに事欠くような人生を送ってきた彼は、こんなものでも不味いと思うことなく食べることの出来るだけの味覚を持ち合わせているのだった。

「・・・親父」

「へ・・・へぇ、なんでがしょ」

猫背の貧相な男は呼びつけられて、ひどく怯えながら彼の後ろに立った。とがめられることを恐れているのだろう。

「・・・この町は、旅籠に随分と差があるんだな」

視線を男に向けることなく、彼は言った。棘を一切隠そうとしない剣呑な雰囲気に、男は小さい身体をさらに縮めてしどろもどろに答える。

「先祖代々、ここでやらしてもらって、ますけんど・・・やっぱ、長年積もった、その・・・もんがですね・・・。ほ、ほら、ち、塵も積もればなんとやら、ですよ・・・」

「・・・そうか・・・」

す、と彼は目を細めた。思うところがあるのか、彼はしばらくそのまま、大して座り心地の良くない椅子に腰掛けたままぼんやりとどこか遠いところを見つめていた。

後ろに着いた男は彼が何も言わないので、何か話題を出さなければならないと思ったのだろう。聞かれてもいないのに、関係のないことを喋り始めた。

「ま、まァ、その、そんなワケで、お金がありませんで・・・実は昨夜(ゆんべ)、娘を・・・」

男の言葉を聞いた瞬間、彼は細めていた目をしかと見開いた。だが、すぐに再び物憂げな眼に戻ると。

「・・・身売りしたのか」

ゆっくりと立ち上がりながら、男のほうに振り返った。

ようやく反応があったからか、男はやけに饒舌になっていらぬことをぺらぺらと喋り出す。だが彼はその言葉を手で遮ると、そのまま真っ直ぐ昨夜の閨(ねや)へ向かった。ぴしゃりと会話を拒絶された男は、ぶつぶつと誰にともなく愚痴をこぼすのだった。

天嶮(てんけん)グラスラクには、山をくりぬいて作られた坑道(トンネル)が随所に設けられている。危険な山道を大変な思いをして登らずとも、それらを使えば心得のない者も無難に山を越えられるというわけだ。もちろん中には自ら進んで山道を行く物好きもいるが。

しかし、その坑道(トンネル)がいつ、誰に、どのようにして作られたのかは

定かではない。この山を管理するアルセルン王国は、千年の歴史を持つ由緒ある国である。だがこの国の歴史書にも、坑道（トンネル）を掘ったという記録は残っていない。それどころか、国の勃興が相次いだ時期の記録にすら既にその存在が明記されているのだ。どれほど古いものなのか、それを知る者はもはやいない。

だがそんなことは彼にとってはどうでも良いことだ。定点ごとに設置された炎霊石のランプによってほぼ全ての場所において適度な明るさが保たれている道を歩く彼の瞳には、周囲の景色は映っていない。彼が見ているのは、道の先だけだ。あえてまだ何かを付け加えるとするならば、魔物。それらを含めることは問題ないだろう。

だが、普段ならば旅の者を襲う魔物達が彼にはあまり手を出そうとしない。それどころか、一部の魔物に至っては彼に並んで歩こうとする者もいた。一方彼のほうも、そんな友好的な魔物には決して手は出さない。ただ、襲い掛かってきた者に限って容赦なく斬り捨てるだけだ。

「・・・・・・？」

ふと、彼は悲鳴を聞いた気がしてＹ字路の分岐点で立ち止まった。基本的にこの坑道（トンネル）は一本道だが、所々ここのように分かれ道があって行き止まりになっていることがある。その片方から、よく通る質の声が聞こえた気がしたのだ。

「・・・・・・」

外套（マント）の下で腕を組んで彼はしばし考える。だが、この二つの道どちらを行けば外へ出られるのか判らない以上、別段どちらを選んでも多少時間を浪費する程度の損失にしかなるまいと考え、彼は悲鳴が聞こえた――と思しき――方へと足を向けた。

それは、今や魔物が跋扈（ばっこ）するようになった現在においては特に珍しいものではなかった。数匹の邪人（オーク）が、逃げ回る少女を喰らい尽くそうと追い回す姿は、この坑道（トンネル）に限らず、また洞窟（ダンジョン）の内外を問わず、

どこでも有り得る光景だ。
あまり複雑でない坑道(トンネル)の中を、裸足で走る少女。その服装は大層粗末で、丁寧に手入れをすれば美しく流れる水のような青髪は、ばさばさに乱れている。
そんな彼女を追い回す邪人(オーク)達は、恐らくその状況をも楽しんでいる。人間の逃げ回る姿、恐怖する姿に至上の歓びを覚えるという性質は、多少の知性を持つ魔物に多く見られる。
だが――彼らのその歓びは、長くは続かなかった。
「きゃっ！」
角を曲がった瞬間、そこから現れた男と勢いよくぶつかり、その場に尻餅をついた。当然、邪人(オーク)たちとの距離はほぼゼロとなる。醜悪な魔物たちの面が、彼女の鼻先に近づいて、彼女はひっ、とかすかな悲鳴を上げた。無意識のうちに、ぶつかった相手の足へすがりつく。
「・・・・・・その手を離せ」
「きゃん？！」
男は、その少女を蹴り飛ばしながら、言った。彼女は床を転がって、壁際へと追いやられた。そして彼は、まるで何事もなかったかのようにそこを立ち去ろうとした。
だが、その行為は邪人(オーク)たちに目当ての獲物を横取りされたという勘違いを喚起させるに十分すぎるものだった。彼らは、その深緑の外套(マント)に身を包んだ赤髪の男に、一斉に襲いかかった。
――否。襲い掛かろうとした。彼らは赤髪の男に触れることはできなかったのだ。
彼らが殺意をあらわにしたその瞬間、ひゅ、とかすかに風を斬る音が鳴り、それに続いて肉と骨を断ち斬る壮絶な音が坑道(トンネル)に響き渡った。
外套(マント)が大きく翻り、その下から現れたルーンブレイドはまるで男の身体の一部であるかのようにしなやかに空を薙ぎ払う。その軌跡は一でありながら十であり、十にして一であった。幾重にも斬撃が

奔り、邪人(オーク)たちの身体を一瞬のうちにいくつにも解体してしまった。自らの死を悟ることなく、彼らはそのままそれなりの貨幣(コイン)の山となった。

「・・・度胸は買うが、な・・・」

消滅した邪人(オーク)たちに一言残すと、彼は剣を鞘へと戻す。かしん、という音がやけに大きく響いた。

そして再び、彼は出口を求めて歩き出した。その深緑の後姿を少女はぼう、と眺めながら、しばらく唖然としていたが、やがて立ち上がると、その背中へ向かって走り出した。

「ねー、待ってよー！待ってってばー！」

山道を無言で下る男の後ろから、先ほどの少女が大きな声を上げながら追いかけてくる。男はあまり速く歩いているわけではないが、二人の身長差が大きいために少女のほうは必然的に小走りの形となっている。

「・・・・・・」

「ねえ待ってよ！ねえったら！」

痺れを切らしたのか、少女は男にすがりついた。それでも男は無言で少女を引き剥がすと、道端に転がして再び歩き始める。そして少女は、それでもめげずに彼を追いかける。先ほどからこれが繰り返されていた。

彼女は最初、まるで反応を示さない男に、ルゥと名乗った。だがそれにすらも彼は言葉を返すことなく、完全に彼女を拒み続けている。それからしばらくは色々と話しかけていたが、やがて彼の気を引くに値すると思われる材料が尽きたのか、今ではもはや呼びかけるだけだ。そしてここしばらくは、もはや声をかけることすら億劫になったのかただ黙々と彼の後ろ姿を追いかけ続けている。

ルゥは、大体九つくらいだと言った。顔は泥と埃と垢にまみれているが、その素地は決して悪くはない。今でそうなのだから、これ

がもっと、汚れを落とし小奇麗な衣装を纏い、出来れば装飾の一つでも身に纏っていれば相当な美少女であるだろう。だが――悲しいかな、この荒んだ時代に貧民でありながら美しいことは決して尊ばれるものではない。事実、彼女はたまたま山越えをしていた隊商（キャラバン）に身売りされ、そしてそこを逃げ出してきたのだった。

だが、そのような身の上話にも彼は興味を示さなかった。ただただ黙々と、歩き続けるのみだ。

ふと、そんな彼の足が止まった。急に彼が止まったので、ルゥは何事かとその背中を見上げるが、彼がしばらく身じろぎ一つせずじっと前を見ていたので、彼女は男の後ろからひょっこり顔を出して、そして、前方にある何かを見た。

そこには、無残な姿に成り果てた何十人もの人間達がいた。正確には、人間だったものが何十体も、転がっている。周囲は空気に触れて黒くなった血で染められ、死臭と、血の匂いが漂っている。その余りの光景に、ルゥは思わず息を呑んだ。

「・・・昨日発った隊商（キャラバン）か・・・？この感じは魔物ではないな・・・」

手近に転がっていた、ターバンを頭に巻いた男の屍骸に残されている傷跡を見て、彼は独（ひと）り言（ご）ちた。その傷跡は、この山に生息する魔物たちによるものではない。武器らしい武器といえば、爪や牙、棍棒といったものしか持ち合わせていないここの魔物達には、この、微（かす）かな迷いを持った刀傷は作れない。

また、周囲に散乱する馬車の中身、あるいは隊商（キャラバン）隊員が身に着けていたであろう装飾品がごっそり姿を消していることからも、魔物による襲撃ではないことをうかがわせる。光物を集める習性を持つ魔物もいるにはいるが、そんな魔物はこの山にはいない。いたとしても、食生活の違う人間の食料や、香辛料（スパイス）の類まで根こそぎ消えているのは彼らの仕業とは考えにくい。

普段まったくと言ってもいいほど感情のない男の瞳が、この時初めて輝いた。ただしその輝きはどこまでも黒く、赤い瞳に宿った炎

はまるで地獄の業火のようだった。
「・・・近くに蛆虫どもが潜んでいるようだな・・・」
そして彼はそうつぶやくと、再び歩き始めた。しばらく放心していたルゥは、彼が大分遠くへ行ってしまっていることに気づいて、慌てて追いかけ始めた。先ほどまでの元気は、もはやそこにはなかった。

そこからさして進んでいない地点で、彼は急に足を止めた。こそこそとその後ろに着いて来ていたルゥは、思わずその後姿にぶつかって尻餅をつく。刹那、彼のすぐ鼻先を矢がかすめた。そしてそれを合図とするかのように、周囲から無数の矢が放たれた！
「・・・無駄な事を・・・」
だが、その矢が彼に届くことはなかった。それらは全て、彼の少し手前で、まるで障壁（バリア）にでも阻まれたかのようにして地に落ちた。陽光を受けて、ルーンブレイドが、そして星型のイヤリングが煌いていた。
矢が無駄と悟ったのか、やがて周囲からは鬨（とき）の声が上がった。その余りのすさまじさにルゥは思わず身体をすくめた。だが、その頭上に、彼女は声を聞いた。
「そこでじっとしていろ」
それは彼の言葉だった。ルゥは、初めて彼の、自分に向けられた言葉を聞いた。それに従うように、彼女は全身を丸くして、まぶたを閉じて耳を塞ぐ。
彼に、いかにも柄の悪そうな男が刀を振りかぶって肉薄しようとする。だが、男は彼の一歩手前で両腕両脚を失ってそこに倒れこんだ。
刹那、彼はまるで風を渡る鳥のように地を滑った。そこに無駄な動きは一切なく、また容赦もない。滑らかに、そして高速で走りながら彼は剣を奔らせる。彼の姿を目で追うことはできず、ひゅひゅ、

と剣が空を斬る音だけが響く。幾重にも重なった残像が彼を追い、それに従って剣の軌跡が残る。その軌跡はまるで天を駆ける雷光のようであり、またそれを見せる彼の赤い髪が相まって、赤い稲妻のようにも見えた。

――そして、全ては終わる。

辺りは静かになった。先ほどまでまるで戦場を思わせるほどに緊迫していた空気はもはやひたすらに静寂で満たされている。

ルゥは、静かに目を開けた。そして彼女が見たものは、外套(マント)で剣の血糊(ちのり)を拭う赤髪の男だった。その足元には、無数の屍が山を築いている。中には胴体と首の繋がっていない物さえあった。

「・・・・・・」

彼女は声がでなかった。その凄まじさ、また彼の余りにも容赦のない鉄槌に、打ちのめされていた。

そんなルゥの元に、彼は戻ってきた。深緑色だった外套(マント)はすっかり血で汚れ、彼の赤い髪もところどころに血と思しきどす黒いものがべっとりとついている。何より、返り血で染まったその感情のない顔は、まるで魔物のようだった。ただ一つ、少しも赤く染まっていない、青い星のイヤリングだけが、まるで人間の涙のように寂しく輝いた。

彼は、呆然と自分を見つめる少女をしばらく見つめていた。沈黙がそこを支配するが、やがて、彼のほうから口を開いた。

「・・・これで判っただろう」

しかし、それが何を意味するのか、今のルゥには理解できなかった。

「俺は、お前を斬ることも厭(いと)わない」

だが、その続いた言葉に、今度はルゥもびくりと身体を震わせた。魔物を見つめるような怯えた青い目に、人の姿をした赤い悪魔の瞳が映った。それは悲哀の夜色をしていた。

「・・・判ったら、どこへなりとも行け。少なくともお前は今、自由の身だ・・・」

彼はそれだけ告げると、今やすっかり紅くなった外套(マント)を翻して踵を返した。彼女が見つめる中、その後姿がゆっくりと小さくなっていく。だが、彼女は意を決して立ち上がると。

「じゃあ、どうしてわたしを助けたの？！」

叫んだ。涙でぐしゃぐしゃになった顔を隠そうともせず、ただその小さな身体から発されたそれは、魂の叫び。

「あなたはなに？！どうして、どうしてわたしを助けてくれたの？！」

彼が足を止めた。僅(わず)かに身体を傾け、その顔を向けて。

「・・・俺はアティス。それ以外の何物でもない」

そして再び彼女に背を向けて、最後に言った。

「勘違いするな・・・お前を助けたわけではない。俺は自分に降りかかった火の粉を振り払っただけだ」

それきり、彼は何も言わなかった。やがて彼が視界から消える頃、ルゥはすっかり血色に染まってしまった太陽に向けて叫んだ。

「ばかあああぁぁぁー！うわあああぁぁぁん！！」

夕焼けのグラスラク山脈に、少女の泣き声だけが響き渡る。まるで魔物が通った跡のように積み上がった死体の山に、魔物は畏れ近づこうとしない。彼らは本能的に悟っていた。アティスと名乗った人間は、人間ではないのだと。それが、もはや自分達より遥かな高みに立つ存在なのだと。

その赤い稲妻に寄り添っていた少女を、魔物がその毒牙にかけることはなかった。まるでそれが彼らなりの、礼儀であるかのように。

真円を描く翠緑の月を見上げて、人でありながら人ならざるもの、アティスはその月に向けてつぶやいた。それは、返答のようでもあった。

「・・・弟に似ていたなどと・・・口が裂けても言えるものか」

魔法を司る神秘の緑に照らされた彼の顔は、穏やかだった。

吟遊詩人達は、詩(うた)に謡(うた)う。

人なりて人ならぬもの、邪なりて邪ならぬもの
彼(か)は天より堕ちて地に交わらぬもの
嗚呼、彼(か)は雷鳴
夜を満たせし光は赤く
世の隅あまねく轟き渡る
嗚呼、嗚呼、彼(か)は赤光の稲妻――

4章1：色

浮かび上がる景色は彼以外全てセピア色だった。彼は、すぐに納得するかのように小さく何度も頷いた。そして辺りを見回す。そこがどこであるのか、思い出すために。

そこには蓮の花がいくつか浮かぶ池があり、小さな噴水が穏やかな空気を作り出していた。水は流れて池の中をゆっくりと歩き回る。けれどもそのせせらぎは聞こえない。まるで世界から音という概念がすっかり抜け落ちてしまったようだ。

池を中心に、周囲は種々の花が咲いている。それらは決して自己主張をすることなく控えめに、視界の中にたたずんでいる。だが、色が死んでいるこの状況では、その微笑みも蝋人形（ろうにんぎょう）か何かが顔に貼り付けているそれのように些（いささ）か不気味にも見える。

空中庭園か。彼はつぶやくが、やはり音は死んでしまったらしい。それが彼の耳に届くことはなかった。

ふと、彼は自分の横に誰かがやって来たことに気がついた。そちらに目を向ける。そこにいたのは、彼だった。

一瞬彼は驚くが、すぐに落ち着きを取り戻した。これは、夢なんだと自分に言い聞かせる。

夢の中の彼は、今の彼がしているような簡素なものを身に纏（まと）ってはいなかった。金色の縁取りも美しい真紅の外套（マント）や、金銀、宝石によって飾られたまばゆいほどの剣は儀式用だろうか。外套（マント）の下はより一層豪奢で、そこには下を向いた三日月を主題（モチーフ）にしたらしい紋章が描かれている。

馬子にも衣装かと、彼は思わず苦笑した。そして夢の彼もその服装は本意ではないらしい。何やらぶつぶつとぼやいている。今にも全てを投げ出してどこかへ行きたいが、それもままならない貴族の息子といった感じだ。

その時、不意に夢の彼が振り返った。釣られて彼もそちらに目を

向ける。その先には、夢の彼と同じように大仰な衣装で身を包んだ少年が駆けて来ている姿が見えた。首からはやはり三日月のような紋章を象った首飾り（ペンダント）。だが彼や夢の彼とは違い少年には色がない。そしてその少年の耳は、針葉樹の葉のように尖っており、また指は四本しかなかった。

彼はその姿に目を丸くするが、夢の彼はそれが当然であるかのようににっこり笑うと、腕を広げて少年を迎え入れた。そして少年を抱きかかえて高く高く持ち上げる。

少年が何かを言っているが、それは彼には届かない。夢の彼には届いているらしく、少年をおんぶしながら、恐らくは声を挙げて笑う。

その光景を眺めながら、彼は自分が今見ているこの夢は、あるいはかつていつかの自分が見た光景なのではないかと言う、半ば確信めいた答えを心のうちに得た。それが正しいのならば、セピアで塗りつぶされた、まったく思い出せないこの少年は一体誰なのか？

答えは、少なくとも今は出せそうになかった。彼――あるいは夢の彼――と少年の姿は兄弟というにはあまりに大きな違いがあるのだから。

彼は様々な考えを巡らせるが、いずれも決定力には欠いていた。そして彼が考え込んでいる間に、夢の彼は少年と共にそこから立ち去ってしまった。彼が見渡せる範囲から夢の彼が消えたその時、彼は急に頭を揺さぶられ――現実へと引き戻される。

「・・・・・・」

最初に見えたのは、薄暗い天井だった。しばらくそのままぼんやりとそこを眺めていたが、やがてグロウはゆっくりと身体を起こした。その瞬間、金槌か何かで思い切り殴りつけられたかのような痛みに襲われ彼は頭を抱えてうずくまる。

「ぐ・・・、・・・・ッつ、つつ・・・・」

顔をしかめながらも、彼は周囲に目を配る。窓には窓掛(カーテン)が引かれているが、その隙間からはわずかに明かりが顔を覗かせている。少なくとも、日は落ちていないようだ。

また、そこにはいくつかの寝台(ベッド)がやや整然と並べられている。自分が横たえられていたものもこの中の一つであり、医療施設か何かとグロウは考えた。結果的には不正解なのだが。

痛みが少し治まったところで彼は再び身を起こす。完全には痛みは引いておらず、やはり顔をしかめている。

「・・・ん・・・？」

ふと寝台(ベッド)の隅に目をやれば、そこに顔を伏せて小さな寝息を立てている、クルーティの横顔が見えた。腕で顔は多少隠れているが、あどけないその寝顔はとても十七の男には見えなかった。

前にもこんなことがあったような気が。グロウはそう思って内心苦笑した。

「・・・いつ・・・つ、やれやれ・・・なんとか命拾いした、か・・・」

クルーティを起こしてしまわないようグロウは自分でも聞こえないくらいのか細い声で独(ひと)り言(ご)ちた。深い溜め息をつきながらもう一度天井に目をやり、記憶が途切れる直前の出来事を思い返してみた。

彼らは森の村を発った後、そこから北へと進んだ。フレウフレ大陸を東西に穿つグラスラクより流れ出でる大河ティナコーンは、東フレウフレ地方を更に南北へと分けている。この河を越えて大陸北部へ向かい、そして更には北の大陸を目指していたのだ。

ところがティナコーン河畔の町で舟に乗って河を渡ろうとしていた時だった。突然青かった空は積乱雲に覆われ、豪雨と突風が周囲に巻き起こり、追い討ちをかけるかのように雷も鳴り始めた。大河は見る見るうちに暴れ竜へと姿を変え、そして小さな舟がその流れに飲み込まれるのにはほとんど時間を要さなかった。

大きな横波の直撃を受けた舟はあっさりと砕け散り、三人とも河へと投げ出された。グロウは他の二人を助けようと力を振り絞った

ものの、大自然の力を前にしてみれば人間など実に矮小な存在だった。辛うじて二人を引き寄せたはいいが、結局は波に飲み込まれてしまい、そこから先のことは全く覚えていない。
「・・・シファムは・・・？」
クルーティはここにいる。だが、シファムの姿が見えない。まさか。一瞬グロウの頭に不吉な想像が浮かんだ。しかしその時。彼は部屋に誰かが入ってくる気配を感じ取って、そちらへと顔を向けた。
部屋内にほとんど明かりがないためにそれが誰なのか即座には判断しかねたが、すぐにそいつは闇に慣れたグロウの目で見える範囲にまでやってきた。数は二つ。
「あ、起きてたのね」
「・・・シファムか。・・・お前も無事だったんだな」
闇に浮かんだ紫紺の瞳がグロウを見つめていた。頭に戴かれた黄金の額環（サークレット）がきらりと輝き、彼女はかすかに微笑んだ。シファムの元気そうな姿を見たグロウは安堵の息をつく。
「ん、お互いね。身体のほうはどう？」
「いや、今起きたトコだ。まだ頭痛ぇな。身体も。・・・で、そっちは？」
苦虫を噛み潰したような顔でグロウは肩をすくめた。そしてそこで彼はシファムの後ろにいる人間に初めて目を向けた。
「ああ、紹介しとくわね」
位置をずらしたシファムの後ろから、その人はゆっくりと歩み出た。そしてややぎこちなく頭を下げる。
「医者・・・兼、魔法使いのフィレイさん」
「フィレイ・アステリスクです。よろしくお願いしますー」
フィレイと名乗ったその人は、腰までの長い金髪を蓄えた女性だった。長く足元まで伸び、ゆったりとした外衣（ローブ）は法衣にも似てどこか神々しさを感じさせる。また、首に無造作に巻かれたスカーフは魔法の力が込められた特別なものらしく、魔術に用いられる特殊な文字が刺繍されているのが見えた。

そして、顔を上げた彼女は、柔らかな微笑みを浮かべていた。その服装とあいまって、一見すると女神のようであった。
「あ・・・ああ、よろしく・・・」
「あ、まだ動いちゃダメですよー、ちょっと待っててくださいねー、今治しますからねー」
ぱたぱたとグロウに駆け寄って、彼女は何やら唱え始めた。周囲の魔素(マナ)が彼女に集い、やがて一つの式として形になる。
「この人があたし達を見つけてくれたのよ。あと、治療もね」
シファムが手近な椅子に腰掛けてそう言ったその時。
「キュア！」
優しい光が部屋に満ちた。それはグロウを照らして疾(はし)り、未だ力の戻らぬその身体の活力となって駆け巡る。光が収まる頃、グロウは先ほどまで続いていた痛みや不快感が嘘のように消えていることをはっきりと実感できていた。
「・・・おお、すげぇ」
「ふふふ、どうぞお気になさらずー。私の仕事ですしー」
グロウが自分の身体をまじまじと見つめていると、フィレイはそう言って満面の笑顔を彼に向けた。
「・・・ん・・・」
周囲の音に意識を取り戻したらしく、クルーティは小さな声を漏らした。ゆっくりと気だるそうに身体を起こしてしばらくぼんやりとしていたが、上からの赤い視線を感じてはっとなった。
「グロウ・・・目、覚めたんだね？！」
「おー、なんとかなー」
「・・・よかったぁー・・・」
ひらひらと手を振って見せたグロウに、クルーティは安心したらしく大きく息を吐き出しながら寝台(ベッド)に身体を沈めた。
「お、おい、大丈夫か？」
「うん、ちょっとほっとしただけ・・・」
そうは言ったものの、彼は安心しきった顔のまま再び眠りに落ち

てしまった。
「・・・こいつ大丈夫なのか？」
「ただの寝不足よ、そっとしておいてあげなさいな」
「・・・寝不足？」
「クルーティさんはー、ほとんど寝ないでグロウさんの看病してたんですよー。私の出番、あんまりなかったくらいですもの」
「そーゆーこと。あんた彼に感謝しなさいよ」
二人に言われて、グロウは改めて傍らで寝息を立て始めたクルーティに目を向けた。懸念すべきことがなくなったからか、その寝顔は先ほどよりも安らかだ。
以前彼の家で厄介になった時も、彼は恐らく丸々一晩グロウを看病していただろう。何故そうまでして自分に尽くすのか？答えは出そうにない。仮に直接聞いてみたとしても、控えめで内気な性格の彼は答えてくれないだろう。
「・・・ところでよ、ここ、どこだ？」
意地悪く笑って見つめている二人――特にシファム――に対して、話をごまかすようにグロウは視線をずらして問うた。どうして自分がそういう対応に出たのかということを微かに疑問に思いながら。
「ジェグリッシュ島よ。こないだまであたし達がいた大陸の南東にある小さい島ね」
「また随分と流されたな・・・」
「聞きましたよー、河に投げ出されたって。大変でしたねぇ。だから、まだ動いちゃ駄目ですよ」
フィレイのやんわりとした言葉を聞きながら、二人とも内心でよく生きていたなと改めて思った。自分たちに迫る大波の高さを今思い返しても背筋が凍るのを感じる。それほどまでの暴風雨だった。
しかもグロウが随分と、と何気なく言った通りティナコーン河の河口からこの島まではかなりの距離がある。潮流の関係で打ち上げたられたのだろうが、それでもそれまでの間死ななかったということは奇跡と言っても過言ではない。

「無理は禁物ですからねー？しばらくはこの村でじっとしててください」
「へーい」
ぴ、と人差し指を立ててフィレイは先からの言葉を締めくくった。
気のない答えを返しながら、グロウは寝台（ベッド）に身体を横たえた。

4章2：紋章の記憶

浮かび上がる景色は彼以外全てセピア色だった。彼は、またか、と思わず呟いた。しかしその声は彼自身にも届かなかった。どうやら音も死んだままらしい。そうして周囲に目を向ける。

そこは前とは違い、荘厳な王宮だった。広い空間には一段高くなった場所があり、そこにいるべき人間はただ一人。他の者にその資格はなく、仮にそこに資格ある人間が立っているのであれば、全てはひれ伏さねばならない。玉座の後ろには、三日月の紋章が描かれた大きな綴織（タペストリ）。謁見の間である。

その空間の端、悠久の時が刻まれたかのような浮彫（レリーフ）に彩られた柱と柱の間に彼は立っていた。自分がそこにいることを確認して、即座に彼はもう一人の自分を探した。この色の無い世界、すなわち夢の中で唯一、自分以外で色を持つ、夢の彼を。

色の無いはずの世界で、色のある存在を探すのは容易だった。すぐに彼は、豪奢な絨毯（カーペット）に跪（ひざまず）く色を見つけた。

夢の彼は前回のような仰々しい服装ではなく、今の彼と同じような、簡素でありまた質素な服を纏（まと）っている。どう控えめに見ても、あのような格好は似合っていなかった。彼はそう思い、自分でも無意識の内に苦笑した。もちろんそれを見咎める人間は誰もいないし、そもそもこの場所において彼という存在に気付いている者は誰一人としていないだろうが。

夢の彼が跪（ひざまず）いた先には、恐らくは黄金に輝いているであろう冠を頭上に戴いた壮年の男性が、些（いささ）か過ぎるほどに豪華な装飾が施された大仰な椅子に腰かけている。男性は十中八九、何処（いずこ）かの国を治める存在であると見て間違いはないだろう。しかしその男性の耳は、やはり彼や夢の彼とは違い丸みを帯びた形ではない。

周囲に畏まる老僕や侍女達も王と同じ身体を持つ。彼や夢の彼のような身体の人間は、他に誰もいないのだ。

この状況を見て、彼は自分が何者なのかという思いをますます強くした。自分が特別な種族か何かだとでも言うのだろうか。いや、確かに周りが持つ身体的特徴を持っていないというのはある意味で特別なのだろうが、それでは前回夢の彼があまりにも豪華な出で立ちをしていた理由とするには少々弱い。

一方で、夢の彼は面を上げて王と向き合う。よくよく見比べてみると、夢の彼と王――すなわち彼とその王――は比較的似たような顔立ちをしている。相応の歳月が刻みこまれている王の顔から時間による痕跡を消し、髪を伸ばせば・・・。

王が何やら口にするが、その声は彼には届かない。対して夢の彼は声が聞こえているため恭しく頭を下げ、そして踵を返す。

夢の彼は退出し、それに合わせて彼の意識は遠退き、そして彼もそこから退出する――目を覚ます。

「・・・・・・」

以前と全く同じシチュエーションである。

「・・・やれやれ・・・」

最初に目に飛び込んできた光景は真っ暗な天井だ。違うのは、どうやら今回は夜であるらしいこと、それから身体を起こしても痛みが走らないことか。

周囲を見渡せば、入り口と思しき扉にかかった炎霊石ランプの薄ぼんやりとした光が最初に目に入った。とはいえ明かりはそれだけで、様子を窺(うかが)い知ることはほとんど出来ない。

「・・・ふう・・・」

とりあえずどうにもならないので、グロウは再び寝台(ベッド)に身体を横たえた。そして先ほどの夢についてあれこれと考えてみる。

色も音もない世界だったが、そこには確かに自分がいた。普通、あそこまではっきりとした夢――しかも、どこかメッセージ性のある――は恐らく見るものではない。故に彼はこの一連の夢が自分の

過去を垣間見ているものなのだと考えている。自分はどこかの王に仕える騎士か何かだとでも言うのだろうか。
ふと思い立って、彼は自分の剣を探す。ほどなくしてそれが部屋の片隅の箱に、ミスリルソードと共に丁寧に入れられていたのを発見する。
明かりらしい明かりが扉のランプしかないので、彼は剣をそのランプにかざしてみた。が、全体を把握するにはその明かりは弱く、仕方なく彼は明かりを求めて部屋の外へと足を踏み出した。
「そういえばここから出るのは初めてだな・・・」
壁にかけられたランプによって、足元が見える程度に照らされた廊下を見渡して彼は独り言ちた。思ったより広いな。そう思いながら、グロウは改めてランプへ剣をかざした。拳一つ分くらいの水晶の中に踊る炎に照らされて、剣がその姿をグロウの前に現す。
些か年代を経ているらしい刃は多少曇っているものの、白銀の身体は刃こぼれもなく未だに衰えているようには見えない。赤い光を受けて、爛々（らんらん）と輝いている。刃渡りはおおよそ一レテム――約一メートル――と少しで、やや幅広の刀身と併せると小型の騎士剣に分類されると思われた。
「・・・こんなのを持ってたってことは、やっぱし俺はどっかの騎士団にでも所属してたのか・・・？」
鞘を腰に吊り、グロウはその剣を構えてみた。この旅で幾度も自然と取った、最も落ち着く構えだ。恐らくは身体に染み付いているのだろう、この姿勢を取ると頭で考える間もなく身体が動き剣を振るっている。
ひゅ、ひゅ、ひゅ。夜の静かな廊下に風を切る音が響く。
演舞のように数回剣を振るって彼は動きを止めた。ゆっくりと剣を下ろすと、鞘に戻す。それからもう一度、今度は刃ではなく普段は自分の手に包まれている柄に目を向ける。
こちらも一体いくつ目になるのかは定かではないが布が巻きつかれており、それを取り払えばそこには長年使い込まれたと思われる

無骨な握りが顔を覗かせた。頭には、他とはやや意匠が異なり、装飾が施されている鍔(つば)。
鍍金(メッキ)がなされているのかそれとも本当に金で出来ているのか彼には判断しかねたが、少なくともその鍔にあしらわれている三日月を主題(モチーフ)としたらしい紋章は、黄金色に輝いていた。
「・・・・・・」
どこかで見たことがある気がした。見やすいように、彼は位置を変えて改めてその紋章をまじまじと眺める。
不意に、夢で見た光景が脳裏をよぎった。これと同じ紋章が描かれた服を、夢の中で自分は纏(まと)っていた。これと同じ紋章の首飾(ペンダント)りを、少年が下げていた。これと同じ紋章の綴織(タペストリ)を、王が背にしていた。
「・・・まさか。まさか、な・・・」
浮かんだ想像を大それたこと、畏れ多いことと一蹴して、グロウは誰にともなく首を振る。
彼はしばらくそのまま立ち尽くしていたが、ふと自分が完全に覚醒していることに気づいて腕を組んだ。今夜はしばらく眠れそうになかった。
「・・・夜風にでも当たるか・・・」
そう呟くと、彼は剣を腰に佩いて物音を立てないよう気を配りながらそこを後にした。

ここ二週間ほどで、随分と劇的に生活が変わったな、とクルーティは思う。
元々活動的ではない彼は必要に迫られなければ家を出ることはなかったし、出たとしても近所付き合いや買い物、せいぜい教会へお祈りに行くなど、その程度だけだった。それが今や、育った街を離れて野を越え山を越え、こんな辺境の地にいる。今まででは考えられない変化と言っても過言ではない。
村のほぼ中央にある池のほとりに佇(たたず)んで、彼はその水面(みなも)を覗き込

んだ。今宵は風がほとんどなく、波はない。彼の幼い顔を映し出すのに十分だった。
水の中に浮かぶもう一人の自分と目を合わせて、クルーティは思わず苦笑した。どうしてこんな旅を始めたのだろう。自分でもよく判らなかった。
あの時のことは今でもはっきり覚えている。死に別れた兄の、最期の顔は忘れることなど出来るはずがない。その兄を見ているようで、兄と話をしているようで、グロウともっと一緒にいたいと思えて仕方がない。完全に孤独になった二年前から築き上げてきた仮面など投げ打って、もっと自分のことを知ってほしいと思える。もっと自分のことを見てほしいと思える。胸が、ズキンと痛んだ。
溜め息一つ、それはどこまでも深く長かった。
その時、がさ、と微かに草を踏む音が後ろから聞こえた。こんな時間に一体誰だろうか。クルーティは身を守るための物を何一つ持ってきていないことに気がついて思わず身体を強張らせた。
「クルーティか。どうしたんだ、こんな時間によ」
「グロウっ？！」
もう聞き慣れた声がした。クルーティは思わず振り返って、その相手の顔を見上げる。
「おう。なんだ、邪魔だったか？」
「あ、や、そ、そんなコトないよっ」
慌てて笑顔を作って、彼はぱたぱたと両手を振る。その様子を見てグロウはくすくすと笑う。
「そーかぁ？何してたんだよ、こんな時間に」
「え？えーと・・・その、ちょっとお月様を眺めてただけっ」
クルーティは何気なく口にしたつもりだったのだが、グロウはその言葉にはっきりと反応した。直前までの笑顔が、強張っている。
「・・・ど、どうしたの？」
「あ、いや、まあ・・・」
グロウにしては珍しく、歯切れが悪く語尾を濁した。明後日の方

向に顔を向けながら頭をかく。何か彼に嫌われるようなことを言ってしまったのだろうかとクルーティは内心不安になったが、やがてグロウの方から話を戻した。
「・・・お前には言っといたほうがいいかな・・・」
「・・・え、えーっと・・・どゆコト？」
話が見えてこないクルーティはただきょとんとするだけだ。そんな彼を見てグロウはくす、と笑うが、すぐに真顔に戻ると、腰から剣を取って差し出しながら彼と向き合う。
「クルーティ、この鍔（つば）の装飾を見てくんねーか」
グロウからそれを受け取ったクルーティは、言われるがままに言われた場所へ目を向ける。そこには、三日月を象（かたど）ったらしい紋章が刻まれていた。
「・・・キレイだね。これが、どうかしたの？」
「ん。お前、結構博識だよな。その紋章に、見覚えとか心当たりとかあったりしないか？」
「博識・・・なんてそんな大それたものじゃないけど・・・。んんー・・・ボクは見たことないなぁ・・・」
「そうか・・・」
「少なくとも、アルセルンやレイロールでは見たことない、かな」
剣を返しながら彼は締めくくった。グロウは少々残念そうだったが、返された剣を受け取ると即座に話題を切り替える。
「あともう一つ聞きたいんだけどさ、耳が尖ってて指が四本の種族っているか？」
「ふえ？」
先の剣とはまったく関係のなさそうな質問が飛んできて、思わずクルーティは間抜けな声を出した。グロウの意図がさっぱり判らなかったので、そのまま彼を見つめることになる。
「いや、今日夢を見たんだけどな、二回・・・。その中に出てきた人が、俺以外全員そんな風だったんだよ」
ばつが悪そうに頬をかくグロウ。

「・・・あー・・・、うん、なるほど・・・」
「だからさ、もしかしたらって思ったんだけど。どうだ？」
「んー・・・」
顎に指を当ててクルーティは虚空に目をやった。必死に記憶を辿ってみるが、少なくともそんな人間には会ったことがない。
「ごめん、知らないや・・・」
「・・・だよなぁ・・・」
今度こそグロウががっかりとした様子だったので、クルーティは何か言わなければと思い、頭を働かせる。
「あ、で、でもっ、でもさ？月の子って確かそんな人じゃなかったっけ？」
「・・・あ・・・」
クルーティとしては苦し紛れに出した言葉だったのだが、言われたグロウには思い当たる節があるらしい。
「そうだよ！確か月の子そうだったぜ！」
「だよね、だよね？」
「お前頭いいな、俺ちっとも思いつかなかった」
月の子。この世界で語り継がれている、最も一般的な御伽噺（おとぎばなし）のヒロインである。異世界から来た彼女が、星の子と呼ばれた少年と共に邪神を倒すという比較的ありふれた冒険譚であり、世界一有名な物語と言っても過言ではない。
「そういえば、彼女もグロウと一緒だよね、世界の日に星に来て・・・」
「え、世界の日に星に行くんじゃなかったっけ？」
「え？」
「あれ？」
しばらく二人は無言のまま見詰め合っていたが、大分経ってからグロウのほうから口を開いた。
「・・・またアレか、俺の記憶が混乱してるっていう」
「ど・・・う・・・かな・・・」

しどろもどろになりながらもクルーティはフォローする糸口を探していた。そして。
「・・・ほ、星に行く・・・って、どこから・・・？」
「そりゃお前、月からに決まって・・・ん・・・だろ・・・って・・・」
即座にそう答えたグロウは、自分でもおかしいの思ったのだろう、途中で言葉を切って沈黙した。クルーティはそれを聞いて思わず彼を指差した。
「それだよ！きっと月だよ！」
「・・・マジかぁ？」
「そうだよ！だってだって、月の子は耳が尖ってるってくだりがあるもん！きっと、月にも人が住んでるんだ！」
「いや、それにしたって俺はそういうんじゃねーぜ？まあ突然変異とかそういうのもありうるかもしれないけど・・・」
何がなんだかさっぱり、とでも言う風に渋い顔をするグロウに対して、クルーティは新種を発見した学者のように笑顔を輝かせていた。
「・・・まあ、仮にそうだとして・・・。で、どうやって月に行くんだ？」
「えっと、それは・・・どう・・・なのかな・・・」
そもそも月に人が住んでいるかどうかすら判っていないのだから、そこに行く方法は当然判っていない。御伽噺（おとぎばなし）ではいとも容易く二つの世界を行き来しているが、それはお話の中だからこそであり、現実は決して甘くない。
「・・・で、でもとりあえず、目的地は決まった、よ、ね？」
「ん？ああ、そう、かな。どうしたらいいのかはサッパリだけどな」
溜め息をつくものの、グロウの顔には少し安心感が漂っていた。小さくはあるが、確実に一歩を踏み出した瞬間だった。
「まあ、今日はもう寝ようぜ。お前、ほとんど寝てないんだろ？」
「え？・・・う、うん・・・」

「じゃあなおさらだろ。今日はとっとと寝て、明日から頑張ろうぜ」
言いながら、グロウはクルーティの頭を撫でた。
「や、ちょ、ちょっと、また・・・」
「おお悪ィ。なんか無意識にやっちまうんだよなぁ」
「・・・そこまで気にしてるわけじゃないけど・・・」
ぱっとクルーティから手を離して、グロウはおどけるように言ったが、彼はクルーティが少し名残惜しそうに見つめていることには気がつかなかった。
「ま、とりあえず戻ろうか」
「あ、うんっ」
グロウの言葉に、クルーティは即座に笑顔に戻った。彼は気がついていなかったが、その時見せた笑顔はここ数年の間どこかへ置いてきてしまったはずの輝きに満ちていた。

5章1：神とは

そこはこの世ともあの世ともつかない場所である。周囲の景色は暗黒に染まり、かつ捻(ね)じれている。あるはずのない風が吹き荒(すさ)び、上下左右の感覚は無く、彼が前だと思えばそこが前であり、彼が地を踏みしめていると思えば足が着く。

この場所を自由に行き来することの出来る者は、魔物達でもごく僅かに限られている。彼はその『ごく僅か』に含まれる数少ない者の一人なのだ。

彼、銀髪鬼アーサーはこの不条理な空間を歩いてある場所を目指していた。通常の空間とは性質を異とするこの場所では、目的地を目指して歩き続けるという行動こそが最も有効な移動手段であり、同時に唯一の手段である。

やがてその空間にも終わりは来る。唐突に視界が開け、それまでいた場所とは全く違う景色が彼の目の前に広がった。

暗い雰囲気が漂う点では先の場所と似通っていると言えなくも無いが、その雰囲気もどこか似ているというにはおこがましい。それは偏に先の場所が異常であるからなのだが。

「遅いぜ、アーサー」

彼の姿を確認した、まるで野獣のような巨人が開口一番そう言った。その場には他にもう一人、あの上半身のみの老爺がいる。二人に向けて頭を垂れて、アーサーはまず謝意を伝える。

「すまない。行きがけにあの子が少し愚図ったものでな」

言いながら彼は空席となっていた椅子へとゆっくり腰掛けた。僅かにそれが悲鳴を上げる。大きなテーブルを挟む形で、最強の魔物三人がここに介したことになる。

一方彼の言葉に、野人は露骨に不快感を露にすると見せ付けるかのように舌打ちを漏らす。

「けっ、だからガキを使うのにゃ反対なんだ」

「仕方あるまい。主(しゅ)が仰い給いし事に手足たる儂らが口を挟むは野暮と言うものぞ」
老爺の言葉に野人は再び舌打ちをするが、居住まいを正してアーサーに向き直った。
「よう大将、俺様はこれからいよいよ星に乗り込むぜ」
言いながら野人が何やら大きな羊皮紙をテーブルに広げた。
「まずは昔の城を掘り起こさなきゃならねぇが、その前に不遜にも主(しゅ)を認めぬ野郎どもを牽制してくる」
そしてそこに記されたある部分を指差した。羊皮紙に記されているのは、星全体の地形を書いた地図である。野人が指差したのはその中でも北西部に位置する大陸メンシェだ。
メンシェ大陸には、この世界で信仰されているヴィーノ教の頂点、教皇がおわす教皇領が存在する。世俗での権力は既に無い教皇だが、その影響力はやはり計り知れない。そして、創造神ラルグドシーユを信奉するヴィーノ教は、彼らにとっては倒すべき敵の一つだ。
「成る程。確かに人間界への足がかりとして拠点は必要となる・・・だがオワイン、儂らの体勢は未だ完全とは言えん。城の修復と両立が出来るのか？」
老爺が言うが、オワインと呼ばれた野人は自信満々といった顔で言い返す。
「両立なんて誰がすると言ったんだ？城の方は後回しだ」
「後回し、だと？」
「どういうことじゃ？」
オワインに対して二人が口々に言う。特にアーサーは心底意外そうな顔をしている。
「へっ、あのガキが洗礼を受けるまではどうせたっぷりと時間がかかるだろうが。そんな奴に城なんざ必要ねぇって話だ！」
判るか、とでも言いたそうな顔でオワインはテーブルを拳で叩いた。その瞬間、それはめりめりという嫌な音を立てて裂けてしまった。テーブルに乗せられていた地図も巻き添えを食って破れている。

「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
嫌な空気が周囲に溢れた。アーサーは二人に気取られぬように小さく溜め息を漏らした。これでは彼がまた臍を曲げてしまう、そう考えながら。

海鳥達が鳴きながら、上空を通り過ぎていく。本日は快晴なり、太陽の光を全身で浴びながらグロウは思わず背伸びをして、日当たりの良い所に寝転がった。
「・・・いい天気だなぁー・・・」
船がジェグリッシュ島唯一の港を出港して既に五日ほど経過している。その間特に目立った事件は起きていない。いや、一応海の魔物数匹に一度襲われたが、それは特に問題視するほどの相手ではなかったのだ。同乗していた傭兵達があっさりと蹴散らしてしまったので、結局グロウは夕食の席までその事実を知らなかった。
今は目的地――実はかねてからの目的地だったが、かなり遠回りすることになってしまった――である港町ファレンまでの行程の内、丁度半分を過ぎた頃合いだ。とはいえ船上で出来ることは余りなく、彼は暇を持て余しているのだった。
クルーティは潮の匂いが苦手らしく船室に篭ったきり本を読んでいるし、シファムは壁に背を預けながら起きているのか寝ているのかよく判らない状態――彼女が言うには、彼女の特殊な力を研鑽する、修行の一環らしい――のまま過ごしている。そして、ファレンまでは道が同じだということで彼らに同行しているもう一人の仲間はと言うと。
「あ、グロウさんおはようございますー。今日もいいお天気ですよねぇ、お洗濯には最高です」
その女、フィレイ・アステリスクはグロウの頭上を通りがかり、

足を止めた。手にはその言葉が示している通り、洗い終わった直後と思しき服を一杯に載せた籠。
「おう、おはよー。相変わらず精が出るなー」
「いいえー、これくらいどってことないですよ」
寝転んだ体勢のままグロウが言うと、フィレイは上から彼の顔を覗き込んでにこりと微笑んだ。ただし、生憎と彼からは丁度逆光になってしまっているのでその笑顔はほとんど見ることができない。
見ての通りである。フィレイは率先して船員達の仕事を手伝っている。最も有意義な時間の過ごし方かもしれないが、それが本人以外にとって最善であるとは限らない。
「それじゃあ、私はこれを干してきますからねー」
「ん、がんばれなー」
軽いやり取りだけを済ませてフィレイはぱたぱたとグロウの元から離れていった。彼は再びお天道様と対面することになる。
直後、フィレイが走り去っていった方向からけたたましい音が響いてきた。
「今日は最長記録だな・・・」
音のした方に顔を向けてみれば、小さな段差に蹴躓(けつまず)いて洗濯物をぶちまけているフィレイの姿が見えた。もはや日課となった光景である。
フィレイは、要するに間の抜けている女性だった。悪く言ってしまえば、無能。料理をやらせれば包丁で指を切る、掃除をさせれば余計に散らかす、給仕をやらせれば盆ごとひっくり返す。何をさせても全く成果を上げてくれないのだ。本人に手伝う気があるだけに、余計に性質(たち)が悪い。結局あまり服装を気にしない海の男達には被害の少ない洗濯を任せることになったものの、それでもこの有様である。
グロウはこの五日間、フィレイが毎日こうして転倒する様子を見てきた。先の彼の言葉を見るに、今回は転倒するまで普段よりも時間がかかったらしい。どちらにしても結果は変わらないわけだが。

とはいえ、そんな彼女が迷惑がられているということは余りない。面倒見はいいし、常に笑顔を絶やさない彼女はどこか憎めないのだった。

「・・・あぁー・・・あ」

余りの陽気にグロウは思わず欠伸(あくび)をした。フィレイは未だに慌てながら洗濯物を回収しているが、グロウは触らぬ神に祟り無し、とばかりに日向ぼっこを決め込んだ。船に乗る前までと比べて、少し日焼けをしているようにも見える彼だった。

5章2：白と黒

近くに聞こえる波の音を背景に、クルーティは分厚い本を読みふけっていた。ただの本ではない。フィレイから借りたヴィーノ教の啓典だ。

彼は港町で育ったが、どうにも磯の香りというものは好きになれなかった。船には酔わぬ性質(たち)だが、それとこれとは別である。おまけに海水も苦手であり、そのため船室からは外に出たくないのだ。そういうわけでどうせ部屋に篭るなら何か意義のあることをしようと思い、彼はフィレイから啓典を借りたのだった。

ヴィーノ教は、世界の子――即ち星の子と月の子――を遣わした創造神ラルグドシーユを信奉する宗教である。故に、その教えを記した啓典には彼らの物語も載っている。それも、一般に伝承されている御伽噺(おとぎばなし)よりも克明に。そこを読み解けば、もしかしたら月へと繋がる道も見えてくるのではないか。クルーティはそう思っていた。果たして、その答えは記されていた。

啓典に曰く、星と月とを結びし唯一無二の道、それは天球を支えし悠久の大樹にあり、と。

学び舎で覚えた知識を探りながらクルーティは他にも何か情報が無いかと頁(ページ)をめくる。天球を支えし悠久の大樹とは、世界の中心に聳(そび)え立つ雲をも貫く世界樹ユグドラシルの事と見て恐らく相違ない。しかしそのユグドラシルは、渦潮と岩山によって外界から完全に遮断された島レグルに存在する。空でも飛ばない限り辿り着くことは出来ない、というのが彼及び一般の常識だ。

しかし啓典に曰く、世界の子は全知全能たる主(しゅ)が宿せし血の道を遡(さかのぼ)りて大樹へと至れり、と。

この下りがクルーティには理解出来なかった。神が宿している血の道が一体何を指すのか、皆目見当がつかない。もはや何度目になるか判らないほど読んだ一文を見つめて溜め息をついた後、彼はも

う一度啓典を最初から繰り直し始めるのだった。
何度かこの文章の解釈をフィレイに頼んだのだが、彼女は啓典を持ち歩いている割に教えに関してはかなり大雑把に記憶しており、はっきりとした回答は得られそうに無かった。
「ああ・・・こんなことならもう少し神様とか信じとくんだったなぁ・・・」
思わず本音が出てしまったが、その言葉の通りクルーティは決して敬虔(けいけん)な信徒とは言えない。それどころか、最も神聖であるべき世界の日に怨嗟(えんさ)を口にするなどむしろ不信心な方だ。当然神学など碌に学んだ試しがなく、魔導学校でも最低限の教養として神学が必修とされていたが、全て最初から覚える気がなかったため一夜漬けでその場を凌(しの)いでいた。ここに来てまさか神様がどうという本に情報を求めることになるのなら、もう少しは一生懸命になっただろうに。
一瞬フィレイの顔が脳裏をよぎったが、彼女に説教を頼んだところで恐らく今すぐにでも必要な力にはならないだろう。もう一度、今度は小さく彼は溜め息をついた。
その時、ノックの音がした。それに続いて今しがた脳裏をよぎった者の声が扉から響いてくる。
「クルーティさん、ご飯の時間だそうですよー」
「あ、は、はいー」
本を読んでいるとやはり時間が過ぎるのはあっという間だ。クルーティは啓典を閉じて寝台(ベッド)へ静かに置くと扉を開けた。そこには果たして、笑顔を絶やさないフィレイの姿があった。
「いつもすいません、わざわざ呼びに来ていただいて・・・」
「いえいえ、いいんですってばー」
自分の部屋に鍵をかけるとクルーティは彼女に並んで廊下を歩く。無言のまま食堂へと向かう。
「そういえば、あの本はお役に立ててますか？」
不意に横から尋ねられて、クルーティは思わず愛想笑いを浮かべてしまう。

「え、えぇ、それなりに」
「よかったですー。何かわからないことがあったら、いつでも遠慮なく聞いてくださいねー」
「・・・・・・」
にこにこと笑顔を向けてフィレイは言うが、彼はそれに対して小さく笑って頷くことしか出来なかった。もちろん、聞いても期待した答えは全く返ってこないからだ。
ひとまず今は本の内容については忘れよう。いや、生真面目な性格のクルーティは忘れることは出来ないのだが、少なくとも今は食事に専念しないと作ってくれた人に失礼というものだ。

黒と闇に彩られた部屋は、それでも明るい雰囲気があった。それは偏にそこで一人玩具と戯れる少年の姿があるからに他ならない。彼が持つ玩具はやはり暗黒だが、無邪気にそれでごっこ遊びに興じる少年は純真そのものだ。部屋の片隅には、そんな少年を優しく見つめる女性の異形。三日月の船に乗る彼女の眼(まなこ)には、とても魔物とは思えない慈愛の光が宿っている。。
「シフォン、そろそろ遊びはお仕舞いにしましょう。魔法の勉強の時間です」
彼女は優しく少年に話しかける。しかし少年はその言葉には耳を傾けようとせず、玩具を離そうとしない。
「・・・シフォン」
「ヤだ」
今度は強めに言うと、シフォンと呼ばれた少年はきっぱりと言い返した。女性の方に向けた顔は、幼さ故に感情を隠せないようではっきりと拒否の色で染まっていた。
「何度も言わせないでください。貴方は神に約束された、王となるべき存在なのです。王は強くなければなりません」
「だからー、神さまに約束されてるなら別に頑張らなくたって大丈

夫だよー」
それだけ言うと、シフォンはにへへと笑う。女性はそれを見て溜め息をついた。実は子供を育てるのは初めてではないのだが、シフォンはどうにも言うことを聞いてくれない。事あるごとにああ言えばこう言う。育児という物がいかに大変な物なのか、思い知らされていた。
彼女はどうしたものかと思案に暮れていたが、不意にはっとなってある一点へ目を向けた。この部屋にはそもそも出入り口らしい物が見当たらない。そこにももちろん何かそれらしいものがあるわけではない。しかし直後、そこに漆黒の霧のような物が現れた。どうやら彼が戻ってきたようだ。
シフォンもそれに気づいたようで、至極嬉しそうな顔をしてそれを見つめている。やがてその黒い物が納まると、そこには銀髪鬼が立っていた。
「アーサーさまぁ！」
男の姿を認めたシフォンは、その懐へと飛び込んだ。懐と言っても二人の身長差はかなりのものがあり、足にすがりついたと言った方が正しいかもしれない。
「シフォン、良い子にしていたか？」
アーサーはそんなシフォンの頭を優しく撫でる。その手に触れる翠玉色（エメラルドグリーン）の髪は滑らかで、彼は思わず微笑を浮かべた。
「うんっ」
彼の問いにシフォンは答えるが、その後ろで首を横に振る女性の姿には気づいていない。それを見て彼はしゃがみ込んでシフォンと視線を合わせると、厳しい顔と声で問いただす。
「嘘を言うな。グウィネヴィアを困らせていただろう」
「・・・あぅ・・・」
アーサーの指摘を受けて、彼は俯いて黙り込んでしまった。もちろんそれは肯定という意味であり、彼には悪いことをしたという自覚があるということになる。

アーサーが言うのと自分が言うのとではどうしてこうも効果に違いがあるのかと、アーサーからグウィネヴィアと呼ばれた異形は肩をすくめた。そして改めて、自らの主が持つ英雄性(カリスマ)に畏敬の念を覚えるのだった。羨望の念はない。彼女達魔物は、そのような不必要な感情を持ち合わせていないのだ。

「さあシフォン、早く彼女の所に行くのだ。私はお前の様子を見ているぞ」

「うん！」

「うん、ではないと何度言わせるのだ？」

「あ・・・、は、はい！」

シフォンはアーサーが頷く姿を見るや否や、背筋を伸ばして彼女の元にやってきた。あれだけ嫌がっていたというのに、この変わり様は目を見張るものがある。

「では私の世界へ参りましょう、シフォン」

シフォンの返事を待たずに彼女は自分が乗る三日月形の船に彼を乗せると、アーサーが出現した時と同じ、漆黒の霧のような物に包まれてそこから消えた。

銀髪鬼アーサーは彼女が消えたことを確認すると、その部屋の片隅に足を運ぶ。そこには、台座に恭しく載せられた大きな水晶玉がある。透き通った白いその玉に彼が手をかざすと、黒い霊気(オーラ)を受けてそれはそこではない別のどこかの景色を映し出した。

そこに映るシフォンとグウィネヴィアの姿を眺めながら、彼はふ、と微笑んだ。そこに宿る父性は、魔物も心を持つことが出来るという事を暗示していた。

6章：神話の入り口

彼女、シファム・ゼルフォースは迷っていた。神域に生まれ神域に育った彼女にとって、神話の世界はもちろん物語ではなくかつて現実にあった出来事であり、その記録と記憶はその血筋に脈々と受け継がれている。しかしその知識を外部に漏らすことは許されることではない。そもそも彼女達聖なる民は神域の外に出ることが滅多にないためその掟が破られる事も滅多にないが、彼女のようにこうして外に出た人間はそれを禁忌とするよう強く戒められる。

もちろん、それは神が定めた聖なる御子らに対しては例外だ。彼らは全てを知る権利があり、全てを識る義務があるからだ。神託によればそれは間違いなく彼らであり、つまり彼女は彼らに尋ねられた事に対して知っている事を全て教えたとしても何も問題は無い。無いのだが、彼女は、迷っていた。

彼らは未だ自分達の使命に気づいておらず、世界の子としての自覚も一切無い。今全てを話したところで、良い方向に繋がるとは到底思えなかった。そしてそれ以上に、彼らは世界の子としてはあるまじき――。

「・・・まさか、島以外の人間に話すことになるなんてなぁ・・・」

彼女は決断した。神が、自ら遣わされた者を間違うはずがない。まだ彼らが目覚めていないのならば、つまり今は全てを話すべき時ではないのだろう。

「どういうことだ？」

「どういうことも何も、そういうことよ。・・・あなたは多分、気づいてたんじゃない？」

そう言うと、葡萄酒（ワイン）の入った杯をゆっくりとカウンターに置いたグロウの向こうで牛乳を飲んでいたクルーティに彼女は目を向けた。彼はグロウの視線を受けてばつが悪そうに器を置くと目を伏せた。

「・・・気づいてたってほどじゃないよ、ただ、シファムの目とか、

魔法とかが普通じゃないなって思ってただけで・・・」
「それだけ気づいてるだけでも十分よ。・・・あたしはラル・クローゼの生まれでね」
グロウはよく判らないという顔をしたが、クルーティは驚愕の色で顔を染めた。ラル・クローゼと言えば即ち神域の名であり、それは同時に。
「ユグドラシルのふもとじゃない・・・？！」
「正解（ピンポーン）、その通りよ」
「んなっ、なんだって？！」
グロウはその言葉に思わず立ち上がった。それから随分と大きな声を挙げてしまった事に気がついて、小さくなりながら椅子に座りなおす。
「・・・ってことはお前、そのユグドラシルのトコに行く方法を・・・」
「ええ、もちろん。まあそれは置いといて・・・」
啖呵を切ったのはいいがさてどこから話したものだろう、と考えつつも彼女は出来るだけ平静を保ちながら葡萄酒（ワイン）を飲み干した。ひとまず最初にすべきことは。
「とりあえず、部屋に戻りましょ。ここじゃ色々と問題があるわ」
彼女はカウンターの周りにいる他の客にさりげなく目を向けながら、グロウに囁いた。次いでこの話は知られちゃマズいから、と付け加える。
そこはファレンの酒場である。宿屋に併設されているそこで、彼女はグロウから質問を受けたのだった。
――月のことについて何か知らないか、と。
それを受けての彼女の最初の言葉は前述の通りだ。だが彼女の持つ知識は通常知られてはならないものである。どうやらグロウはそれを理解してくれたらしく、無言で頷くと代金をカウンターに置いて立ち上がった。クルーティもそれを見て立ち上がる。
「とりあえず、あんたたちの部屋に行きましょ。広いし」

「判った」
答えてグロウはすぐに歩き出す。自らの記憶に直結するかもしれない情報を、思いがけず仲間内から提供されるということで些か気が早くなっているようだ。その後ろ姿をクルーティが追い、更にその後ろを苦笑しながら彼女が続く。
だがこの時、彼女達は誰一人気づいていなかった。その姿を見送る、翠緑色の瞳があったことに。それは一言見つけたぞ、と呟くと、やがて彼女達を追うようにそこから立ち去った。

「まずあたしから話をする前に、理由を聞きたいわ」
グロウらの部屋に入るや否や扉に鍵を閉めて、シファムは言った。彼女の意図を掴みかねる二人はお互い困惑した顔で見詰め合う。それを見た彼女はぴ、と人差し指を立てると急かすように付け加えた。クルーティがテーブルに置いた炎霊石の明かりが、風もないのに微かに揺らぐ。
「だからー、なんであんたたちが月に行きたいのかってことよ。大体、月のことを知りたがる人間なんて普通いないじゃない」
「あ、なるほど・・・。ええっと・・・」
「ああ、俺から話すよ。クルーティはどっちかっつーと俺が巻き込んだだけだしな」
彼女の勢いに気圧されて、しどろもどろになるクルーティを撫でてグロウは口を開いた。自分が世界の日に別の世界、恐らくは月からやってきただろうという事、自分が記憶喪失である事、そして記憶を取り戻すために月についての情報を探している事。グロウはそれらを全て、包み隠さずに彼女へ語った。その間クルーティは少し恨めしそうにグロウを見つめていたが、彼女はそれには気にせずにグロウの話に聞き入っていた。
「まあそんな感じだ。・・・上手く説明出来てるといいんだが」
頬をかきながらそう締めくくったグロウの顔を彼女はまるで品定

めをするかのように見つめていたが、ふう、と溜め息をつくと、寝(ベッド)台を椅子代わりにするように座って足を組んだ。紫紺の瞳に写り込んだ明かりが踊る。
「月から、ねぇ・・・。にわかには信じがたいけど、とりあえず信じとくわ」
「いや、お前月のこと知ってるんじゃないのか？」
「月の民は星の民とは違う姿をしてるのよ？それは星月物語にも普通に出てくるじゃない」
苦笑しながら言うグロウに対し、彼女は腕を組んで言い返す。グロウはそれには確かに、と答えるしかなかった。
「まあ、いいわ。とりあえず、あたしが知ってることを話すわね」
「おう、頼む」
言って、グロウは頭を下げた。クルーティもそれに続く。彼女は別にそんなことはしなくていい、という台詞を前置きに、まるで唄う様に語り始めた。
「星と月は互いに向き合う相対(あいたい)する世界。どちらが表ということはなく、どちらが裏ということもない。二つの世界は神の御懐に抱かれてただたゆとう。
神域に根ざして天球を支えし悠久の大樹は狭間を貫き世界を結び、故に其は無二の道となる。
・・・ここまでは、多分啓典でわかってるわよね？」
彼女は改めて二人に確認をし、二人は黙って頷いた。それに応じるようにして小さく頷くと、再び彼女は口を開いた。
「神の写身(ユグドラシル)は中心に聳(そび)え立つ。其が袂(たもと)に暮らすは神より遣わされし神域の民。神が膝元を守り道を護りし民の名は蒼き夢幻(レグル)の血。
彼らの元に繋がる道は、神が創りし血の道一つ。四つの分神があるように、道は四つに穿たれて、再び廻る世界の子を待つ。
・・・確かこんな感じだったかな、神域の歴史」
「うろ覚えかい」
話が一段落したのを見てグロウは思わず口を挟んでしまったが、

彼女の詩(うた)が自分の知りたい情報そのものであることはしっかりと理解出来ている。
「ボク啓典読んだけど、シファムの言ってることのほうが詳しいね・・・。・・・・あ、で、シファムはそれがどういうことを言ってるのか、ちゃんとわかってるんだよね？」
「当然よ。焦んないの、順序ってのがあるんだから」
彼女の言葉を受けて、クルーティは肩をすくめて小さくなった。それからそうだよね、とだけ呟いて、彼女へ目を向けた。それは続きをお願いします、と言っているようだ。
「まああたしの出自はどうでもいいから省くとして、最優先事項は『血の道』ね。
結論から言っちゃうと、この『血の道』ってのはラル・クローゼに繋がる魔法陣のことよ。転移のね。この魔法陣のところに行く以外に神域に達する方法はないわ。・・・ああ、一つだけ例外はあるけど、それは現実的じゃないから割愛」
「その例外ってのも気になるが・・・非現実的っつーならまあいいか」
「そっか、神様を宿してる血の道を遡(さかのぼ)るってのは、神様が創った転移の魔法陣をくぐるってコトだったんだ」
「その通りよ。・・・フィレイさんは敬虔な信徒のわりにその辺りはさっぱり記憶してなかったみたいだけど、つまりはそういうこと」
彼女の言葉を受けて、二人は思わず苦笑した。まるで空気が緩むのを待っていたかのように、明かりも笑う。
話題に上がったフィレイはこの街に着いた次の日に南へ向けて発ったが、最後の最後までその間抜けぶりは光っていた。船に乗るはずだった当人が乗る船を間違えていたため、ろくに相手を見送る時間がなかったのだ。大慌てで船に走ってくるフィレイの姿を思い出して、グロウは思わず笑ってしまった。ちなみに蛇足だが、慌てて走っていたフィレイはもちろん盛大に転倒した。
グロウが笑ったのにつられたのか、クルーティも小さく笑いなが

ら口を開いた。
「確かに・・・フィレイさんに聞いてもサッパリわかんなかったなぁ・・・」
「お前聞いたんだ？」
「うん、だって啓典貸してくれたのフィレイさんだもん。・・・あ、まあ、でも、とりあえずフィレイさんのことは置いとこうよ」
「っと、そうだな。ん、で？その肝心の魔法陣はどこにあるんだ？」
グロウは期待を膨らませているらしく、ずいと身を乗り出した。
それに合わせるようにして、彼女は口を開いた――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0845c/

ASTOON STORY

2010年11月3日14時48分発行